

# 野津原方言集

# 続 14

「七瀬川野津原」

平成十四年夏

横四〇・縦四五種



野津原方言集 続編No.14 ……平成24年

表紙画 ……酒井治郎

題字 ……姫野順子

《東部小》 ふじまるかのん。みうらきひろ。!

★ ご協力の皆様 ★

岡本政雄《野津原》河村アヤ《大分》足立 勇《光吉》  
佐藤喜久代《野津原》宮本花見《野津原》野津原公民館  
住田政利《大分》波多野テル子《野津原》野津原商工会。  
故人□橋本杉平様、内藤忠人様、和田義人様、佐藤吉晴様。

三輪ノブ 森下常夫 三輪道明 佐藤昌史

★ 使わせていただいた資料 ★

肥後街道を歩く、 光吉村の由来と伝説、  
丸克製陶所、薬師窯、文化財調査こぼれ話、歴史記録会、  
読み語り資料、文化協会演劇部資料、肥後街道資料、  
月のうた、岡倉神楽伝承資料、野津原伝承民話資料。

★ 調査⇒小野寿祐、佐藤源治、那須政子、赤星ヨシミ。  
調査協力⇒甲斐英行。監修⇒小野寿祐、赤星ヨシミ。  
カット⇒那須政子。カット集団⇒中部小学校カット集団。  
構成プリンター⇒佐藤源治。

平成24年8月吉日

野津原方言調査会 大分市野津原竹矢

☎ 097⇒588⇒0572

事務局 野津原本町

☎ 097⇒588⇒0092

もくじ

もくじ……………	2	方言子どもん世界……………	5 3
はじめに……………	4	あんた元気な……………	5 4
あげな話こげな話……………	5	残しちくれた……………	5 6
明治⇨大正……………	6	鶴見山に貰われ……………	5 8
昭和初期⇨20年……………	8	悠ちゃんの誕生……………	6 0
三佐から竹田……………	1 0	恵まれた水……………	6 2
キラスぶげん……………	1 1	親知らずん結婚式……………	6 4
泥ぼうがひじい……………	1 3		
松根油……………	1 5	女性の底力……………	6 6
		千人針……………	6 7
ちょいと一照……………	1 6	肥だし……………	6 9
神楽ん練習……………	1 7	掃除の生きがい……………	7 2
のほるふんど……………	1 9	方言説明……………	7 5
方言単語……………	2 1	五助こぼればなし……………	7 6
『う』ロウ……………	2 2	七の瀬渡し……………	7 7
		向こう光吉……………	7 8
ふるさとん味……………	3 4	天領地街道……………	8 0
ひきのべ……………	3 5	人の優しさ心の花……………	8 0
旗たてん鶏飯……………	3 7	方言説明……………	8 1
あれこれ餅……………	3 9	狸ん話……………	8 5
五助物語ロ4……………	4 0	五助ん馬子歌……………	8 6
湛水かる今市……………	4 2		
石だたみ……………	4 3	方言単語……………	8 7
イビラ餅……………	4 5	『え』ロシ……………	8 8
丸山八万……………	4 6	あとがき……………	9 9
地主んみやげ……………	4 9	伝言板……………	1 0 0
今市文化財……………	5 1		

## はじめに

多くの皆様に支えられて 続編№14号も発行できました。ご愛読くださる皆様が 作ったようなものです。故郷で先人が生活用語として 長年使い慣れ親しんだ言葉。文字もさほどに広まっていなかった そんな時代から使われて それが心の絆となって支えあい 助けあった生活には潤いと 情愛があってみんなが 同じ思いで暮らし 故郷を守り受け継いで来たのです。言葉とは有難い生活用具です。

『今日は何しよんの』『植ゆるかえ』『しゅわねえな』『ふがいなあ』『いいあんべーに降るなあ』『天気なっちよかったなあ』

見たら解るんでん 一言声をかけち心通わする。いつも皆んな健康かち 自分のこた一さておいち 気づかう。自然はどうにんならんでん 天気を喜び 潤いん雨に感謝する。自分一人じゃ生きられんぬう ちゃんとわきまえち 相手に感謝しあう崇高な思いやり。

取り組んだ平成4年からの 資料がまだまだ沢山あって 次に盛り込む予定が 入ってくる新しい資料に遠慮している。でも顔出して『まだかえ』と 催促される時 そんな資料 話をしてくださった顔が ぱっと輝き喜んでくれます。故人となられた方の話 もっとあの時間聞いておけばと 悔やまれるような。

上浦のご愛読者の表紙画から 支援してくださる方が続き小学生、主婦、版画家、水墨画、童画、カットなどがなどがお粗末な冊子には似つかぬ 素晴らしい表紙に今は 戸惑いも感じています。余暇に全て手造の冊子を 愛読してくださる皆様にお届けできる 何と幸せな事かと感激しています。今回どうかお楽しみを程を お願い申し上げます。

表紙画作者紹介

作者略歴



子猿歌  
高橋の自然博物館 二階 二号室  
早稲田大学  
高橋 善吉 画

身上

愛媛県西豫市宇和町

大分市羽屋九組

酒井治郎

夢豈、坤、九台山人

大正八年三月二十日

大分県水墨画協会、風韻漢詩会

画歴

昭和五十四年六月 大分水墨画同好会入会 佐藤芝郊先生に師事

昭和六十年四月 大分合同新聞社水墨画教室にて 詫間夢鳳先生に師事

平成一年八月 夢鳳碩水会に参加 引き続き詫間夢鳳先生に師事

平成四年三月 画廊セゾンにおいて 第一回個展

八月 大分県立芸術会館において 豊の国百景展 同時に画集出版

八月 八幡浜市立図書館において 詩と豊の国百景による兄弟妹合同展

平成五年八月 上海・横浜友好展 上海書法家協会優秀賞受賞

平成六年八月 風韻漢詩会参加 古賀了介先生に師事

平成八年八月 第一回全九州水墨画展 瀬木賞受賞

平成九年七月 漢詩集節齋五弟詩鈔 共同出版

七月 第二回全九州水墨画展 大分合同新聞社賞受賞

八月 大分県水墨画協会設立に参加 副会長就任

八月 第十回全国水墨画秀作展 特選受賞

八月 産経新聞アト展 特選受賞

五月 第三回全九州水墨画展 瀬木賞受賞

八月 第十三回国民文化祭 実行委員会会長賞受賞

七月 第四回全九州水墨画展 郵政大臣賞受賞

四月 第一回日中交流水墨画展 審査員奨励賞受賞

七月 第五回全九州水墨画展 北九州市議会議長賞受賞

七月 第十五回国民文化祭 毛筆事業協同組合理事長賞受賞

七月 第六回全九州水墨画展 総務大臣賞受賞

七月 第七回全九州水墨画展 福岡県議会議長賞受賞

七月 第八回全九州水墨画展 日本・中国文化交流協会賞受賞

七月 第九回全九州水墨画展 北九州市教育委員会賞受賞

四月 第十回国民文化祭 実行委員会会長賞受賞

四月 大分県立芸術会館において 米寿展 同時に画集出版

# 五助の

# 南無阿弥陀仏



明治…大正から 昭和初期…戦前 戦中時代

いずれ詳しい資料が出た時い 挿入する事いしち ここじゃ戦前の世の中う覗いち見ろう。まとまった部分だけにしちやります。

生活全般が厳しくなっち戦時色も濃ゆうなつた。こん頃かるあつたんが『村八分』 火事と葬式以外は無視すると言う差別でんあつたが 中にゃどっちにも言い分がある事態も。

甘いもんと言えは黒砂糖 ほけー干し柿が使われ 水飴う作るしもあっち キザラ《三温糖》なんかいいほうじゃつた。麦飯 味噌菜に晩飯ゃダンゴジルが定版。味噌汁に漬け物んがつきゃーいいほう。葬式ん米飯を楽しむ 大釜んコガレが人気んいいもんじゃつた。

火葬場が柿野にあつた。土葬が多かつたが時折ん火葬にゃ割木を持参する。オンボウが火葬の世話をしてくれた。土葬は組内んしが穴掘りを受け持つ…イケカキち言うがこの仕事をしたしは 御神酒が出た。葬儀の連絡も組内の仕事じ歩いて提灯持参 受けた家は必ず接待の食事を準備した。

戦争が厳しくなり松根油を取る仕事 木炭《バスなどに利用》焼き 軍需工場などに動員されち農家は 年寄り女子供がほとんど。赤紙…召集令状…で元気者は軍隊に工場に。見送る人も出る人も別れの水杯をする。学童疎開 防空訓練 経済取締りも厳しくなつちやんがち配給制度。衣料切符かる酒なんか祝言か葬式に1升特配だけ。供出もだんだん締め上げられ農家んしも ベイセンキシタ米を食う始末。そん影じけっくしゃオロイーシハ闇取引 タバコ 酒米 なんかが町んしの着物と交換しよつた。

横文字使うなち言うにモンペ、ゲートル、ビスケット、アンモニアなんかゆう使いよつた。訳ん解らんまめーにじゃつたんか。

国防献金、国債《弾丸債券》 金属供出《タンスのとりてなど》  
隣組、勤労奉仕…若い人たちは軍需関係工場、生産施設、生産現場  
に駆り出された。学童は分散授業で神社、寺などで勉強 上級生は  
食料生産奉仕。共同作業 モンペ姿とタスキがけで働く そんな場  
面が当然となった。

子供の遊びはそこらそんげにある 材料で工面して遊ぶ中から新  
しい知恵も アイデアも浮かんで遊び道具には不自由せんじゃった  
。竹 木 草 何でん遊び道具 そりーどこん年寄りでん自分の孫  
んごつムドガル。怒ってん親は感謝するような環境じ 自然子供ん  
体験、情操教育が身に染みついちくる。人ん痛みが解る人間哲学が  
備わちくる。

アンモニアを水じ溶かしち麦にやると 元気ゅ取り戻しち青々。  
霜柱うおしたくるごつ麦踏みすると ザックザック軽快なりズム。  
モミスリが始まった雪がチラチラ 斗棒かけち俵に詰めこんだぬ  
四斗ビョーち言うがピラリ担ぐと奥に積み上げた。甘酒とシャクシ  
ナン漬け物 トイモも並んだ米すりんツボサキ。年寄りんくわえた  
ばこがゆう似合う 顔んしわが長年故郷ん移り変わりう見ちきた。

メグリ棒じアヤシタ大豆が飛びまわる 豆柄は風呂たきん燃料。  
農家にゃ無駄なもんねえき 藁が俵に縄にサンドーラに 筵にも  
なりセンチンの潜り戸にも使われた。フセモントコ囲いも出来ち糲  
すりんもみ殻が トイモ床に早変わりする。牛馬の飼料になり藁こ  
ずみが田んぼじ季節風に震えちよる。

ひびぎれ あかぎれにゃコーヤク焼き込めち言う。痛かろうち思  
うな一甘やかしち コボクレ石けんじ洗たくする若嫁ん指先 まっ  
赤に染まるぬ一見りゃ里の母親 さど辛かろうがこれも宿命か。心  
まじゃ貧しゅうならんごつせにゃのや。

みんなひじいんど戦争がありよるきの。



## 昭和初期から20年代の生活環境

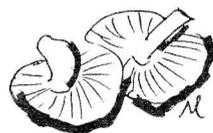
五助さんがん話がちっと深刻になったのも 無理はねー戦争が身近い感じがするごつなってきたきじゃ。田舎も暮らし向きが窮屈になっち 小作んしがお手上げ状態になった。銭がねー『元気が取り柄』ちそれも解るで…でん貧ほずひじいもんなねー…ちも言う。年越しが出来んき年の夜は逃げ回る。除夜ん鐘が鳴っちえーと助かったち言う始末じ でーぶん助けられたしもあったんじゃねー。

ところじ 米すりがすんじ儀につむると ホズミうかけち表せんぬつくる。改良議員が検査しち白 赤 青 紫は不合ち言うトットン安い米。サザメう納めち残りう売っちそん残りがヒョウロウに。トーラオキにゃほんちっと積んだ米儀がいのちきん弦。イモジも買うち貰いださんのう。

ダンゴジルん小麦粉すりん娘が 水車に來ち蜘蛛んエバが揺るるぬー ぼかんち見よるのん やんがちアルクけんど嬉しさと不安が米ん出来が悪いきよきー苦になる。湯沸かしするくどんはたじ団子を焼く 貰い湯じせがわれた夜 イドラん花やらテマリコが好きじゃつたあんし 朝草切りじ背のほずある草ん中じ……あげな事もあったぬー思いでーちくる。

よなべに繕うフセモン カマブタブセも上手になっち そげな日がくり返されちイマキ こしまき オコシ やんがちズローズになった。ヘコ フンドシがシャルマタに 紐が引っ込んだしもうち押さえた手が放されん。葉すぐりしよったら割れ目に入ったち 痛えの痛ねーの……大事つくりたてた。

裸電球でん停電になろーもんなら そん晩なもう灯はつかん。ツボ先いゴザウ敷いちダンゴジルすすり込む。簡単な夕飯じゃが食えるだけいいち 思わにゃ罰があたると。



早うチョウチンぬ かんちょろを 気の効いた家にゃガス灯もあつたが。大掃除にゃ区長と駐在巡查も来る…検査に通らんとヤリナオシ…また次の日にけんさ。カンカン帽子 サーベルん音 シャツポ 学生ん帽子にゃ夏に日覆いがかかる。

根づけ《田植え》取り上げ《収穫》シノウ《取り上げ 脱穀》がすんだらほっと一息。じゃがノシロフミ タウエヨコイ ウロイヨコイ ソボサン 雨乞いと 88の手がいるかる米の字が出来たち言う。手間がい 道づくり 井路普請 水番 時間水なんかも 米づくりん役割。

『食べたな』『植えるかえ』『洗うな』『使うな』『しょわーねえな』『いつでん言いな一え』一言が心のこもった温かみんある心くばりん言葉。相手をおもいやり幸せを念じちよる。相手がよいなゝ自分もいいきなえ。『牛見が来た』『卵吸い物でん出しな一』咄嗟に 機転が効くのん隣近所ん縁。『暑いな一』『寒いな一』『ふがいいな』『いあんばいに』『うんがいいの一』自分の事んごつ喜びあう。

『やせうま食うたら盆踊り行くで』『ちょっと待って』若い二人は賑やけ一。素人演芸も上手じゃつたが踊りも…更けた夜中にゃヨバイが 娘は待つもどかしさと不安も…おやじが割れ木を持ちちアガリントに構えちよる。娘は大声じ蛇がおった…タマガッタ親父がこっち来た拍子に娘が男しを 裏に回らせた。

野津原《特に本町にゃ》にゃ馬車が12台はずあつた。大分まじ荷物やら材木やら賑やかじ かんたんにゃ野津原ん名前が大手をふちよつた。帰りの馬車が酒屋の前で必ず泊まるのん 飲み屋んしが馬をテナズケチョツタとか。商売上手。台ばらし 立て棒 湯たて…なんかは馬車引きの心情が滲むごたる。ナガセ シケ 雷雪降り 楽ばっかりじゃね一馬車引きにも 苦労は予想以上ににもあつたんじゃね一。人の仕事ゝゆう見ゆるもんじゃが。



五助馬子唄ばやしから 『三佐から竹田は13里』

旅人荷物運んじ帰り道 アオもチツタくたびれたごたるき道端 草が茂ったとこり一繋いじ五助も一服するこち一した。旅人二人連れが立ち止まると 『三佐かる竹田まじゃ何里なえ』『そーじゃな一13里で』『そうな やっぱ』 首う傾けち歩きで一た。見送った五助もそげ一不思議にゃ思わんじやつた。

が へもどったさっきん旅人が又 『三佐かる竹田は13里じゃったなえ』『そうで13里で』『おかしいな なんぼ歩いてん13里じゃ行きつかん事いなる』『えー……』 ゆう考えち見りゃそれもそんはず 『三佐かる竹田…13里』 コリヤー誰に聞いてん変わらんはず。こげなしはココカル竹田マジワチ 聞くのなら話ゃ別じゃがなえ。

三佐かる竹田…これは三佐で聞いてん 府内じ聞いてん 野津原じ聞いてん 全く答えは同じじやつた。

すたすた歩いち行くしにえーと追いついた五助 『ちょいとあんたどどこまじ行くんな』『いんにゃ竹田まじジャケンド どこまじ行ってん13里じゃモンジャキ 狐にでんつままれたんかち ちょいと心配になっちしもうチョツタンデ』『そりゃーそうじゃコトあんたどーん聞き方が悪いき 13里は減らん訳じゃねーな』『そうかなー』

五助にくわしい話ん仕方お聞いち 『なるほど』ち感心しちしもった。『あんたなかなかくわしいなー』『ま一馬子う長うしよるとおちった一知恵もつくき』『面白いシジャな一道連れになっちくるるな』『いいで』 それかるも話が弾うじトウトウそん晩な 五助ん家に泊まるこち一なった。



五助馬子唄ばやしから 『キラスぶげん』

水飲み百姓ち言うはず小作人な いのちきがえーと出来る時代。それでん心はどげな金持ちよりん 豊かじ人情も熱かったごたる。米も小作米に納めち 麦かダンゴじるが飢えも忍べる。ジャモンジャキ魚ドマ見ると『こん飯泥棒』ち 追いまくったそうな。人は貧乏しちよつてん心マジ貧乏にゃなりとーねーもん。

『こいさキラス貫うたきチットやるで』 隣んばあさんが前かけん下に隠しち持ち来た。『りゃーご馳走じゃねーな ほんなうちも晩のオサイにしゅう…ちよいと待ちなー』 戸棚かるコイサ食ぶるつもりじゃつたんか ハスイモン酢和えをだすと 『こりゅう食べて』 心の情愛が行きつ戻りつする これがツツロク人生でんある。

ツツロク…俵を編む時に藁縄を巻きつけた 瓠形のん農具を桁の前後に渡して 藁を挟みながら交互に取り交わすのを くり返す事から どちらも気持ちが1つにならにゃあ 製品が出来ない二人三脚の道具。つまり持ちつ持たれつである。支えあい助けあう事で事が成り立つもん…人生も全く同じである。

『さあ これじコイサン おさいも出来たし じいさんの酒ん肴にもなるき』『ウットウもキラスん油炒めにしゅう』 二人は顔見合わせて笑ったら 丁度嫁ごが帰って来た…在所に加勢に行ったモンジャキ土産もあるごたる。『あら隣んババさん ちょうずよかった在所ん母かる土産う頼まれち』 差し出した包みは常日ごろかる相談相手になる そげな気配りじゃろう。『うちにえーすまんなー みんなサカシカッタ』『オカゲジ』 ポロリ涙がこぼれそうな…『キラス貫うたんで』『いつもすみません』



親娘のような身内のような温かさが 仄かに流るる夕方ん隣同士ん会話は いつしか暗くなるまじも。

## 五助街道物語りかる…『出針ん諺』

ちょういと出かくるに久しぶりん羽織 それがどげした事か袖口がチットホコレちよる。『しもった大事じゃ早う気がちーちフガイイ』 慌てまくっち針うつまむと糸を運んだ。『出針りゃ縁起が悪いちゆうで』『仕方ねーわい 気がつかんじゃつたんが悪い』 気にしながらる途中じ何べんも『しょわーなかろうかち』

常日ごろかるナオス時い気をつけちょきゃ しょわーなかったんじやがち。気がちーたきよかったものアブネ 恥じうかくところじゃった。ひょいと途中じ怪我でんすりゃこす…ほら見たかやっぱのー縁起がち。偶然かん知れんでん結びつけたがる。心ん準備こす生活上手かん知れん。そりーウカツに針が折れ込んじ残る 刺さる 怪我うする…そげん事なんかもあるかん知れんきのー。

五助さんも鞍に針糸何かを袋に入れちイイツケちよる。道中じ困ったしが助かるち喜ばれたりもする。朝蜘蛛は縁起がいいとかユウ百足もいいとか 朝の坊主に夕方ビクニも。人間な弱えもんじゃき何かんたとえじ いい方に決め悪い方じゃ用心ぬする。早めにシコーしちょきゃ気がつく事も多いき そげな心がけシヨチ言う戒めかん。



五助さんもモトモト頓知もあっち 頭もいいんじゃろうが 仕事柄ヨキー人ん出会いん中じ 聞いたり見たりする事かる覚えた 知った事も案外多いんかん知れん。早う言ゃ請け売りじゃろうがそれが又 ユウシタモンジ似合うき不思議でんある。まあ徳人じゃろうなソゲナ人間性もある。

人に好かるりゃ知っちよるこたー教え 役に立つことじ喜ばるりゃ相手も自分も 嬉しいもんじゃき勉強したり聞いたりもする。そきい世の中ん善意が人ん真心が通い合うんじゃろう。馬子唄を唄うち帰る 皺ん横顔にゃそげな優しさが 感じらるるんも人間的価値観か。

五助物語かる 『使わるるより泥ホガひじい』

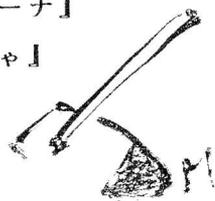
『まゝノサンナ』『おーきに』朝早うかる麦ん中うち づー腰が痛えぬ辛抱しちシヨルンヌ見かねち 声うかくると待っチョツタごつ 鍬う つっぱり一腰うのした。年ん加減か長続きゃもう無理んゴタル。それでん若えもんが銭取り行くき チットデン加勢シチャローチ思うが もう無理ゝ効かんごたる。

若え時ゝデーブンハリクージ夜遊びもお手のもん。夜明け頃に帰ちツルット眠ると夜のヒキアケにゃ もう草きり出ちイキヨル。それでん力仕事でんクジも言はんじ フントゆう働きよったが。

『甘酒沸いたき飲みなー』『りゃー珍しい オバンが手際いいきのう』 手先が冷えきっち腹もへっち喉も乾いチョツタキ 『何とんうもーなあ』 奥かるばあさんも出ち仲間に入った。『そげー褒めらると帰りいチット持つちカイリゃいい』『えーいいんな』 皆の笑顔がぱっと明るうなっち……やっぱいいな 笑顔は。

『もうヨダキュなつたきヤミュー』『鍬ん泥は落としチョキナーエ…鍬が使わるるより泥んついたまんまがヒジイち言うき』『そげー言うなえ どこかんしゃ馬屋ん肥うウセタママ馬屋え繫いじ 遊びいったしもオッチノヤ』 話が弾むとトテツケモネー話いなった。そげなアラマシんしもおりゃ コガロウつけたまま田に置いち帰ったしもおった。

ばあさんがヨコワシュウチ思うち 鍬ん泥う洗い落としよるぬ 若嫁ごが帰ちくると『ウットーガ洗うわ』 日ごろ世話になる恩返しにと 姑ん影を見ながらいい嫁ごニト心が向いている。『そんなユウシチョキヤ又いい事もあるきな』 顔見合わせち微笑む二人。『ありゃ鍬洗うちくれたんか』『義母さんが洗うたんで』『嫁ごで』『すまん一俺が貰いたかったのー』『もー遅イワーナ』『そうかシカタネーノー虫糞出るきのや』『ちゃりゃ』



五助物語かる 『狸をだまくらけ一た五助』

大野を出る時やもう陽が西いで一ぶん 傾きよったが慣れた道じゃきいいか一ち五助さんらしゅうね一帰りかけた。あんのじょう宇曾山の裏まじきたら もうまっ暗うなっちしもった。馬は夜目が効くき手綱う短う持ち細道う帰る。峠道ん途中じ道がワカサレちよる。『おかしいの一こげんはずじゃね一に』

一本道しかね一な五助さんの専用道路みたいな こん道。どうやら狸が出て化かしたな一慌つるこた一ね一き一五助さん落ち着いち腰んたばこ入れう こそっと出すとキセリュひんにぎり 『しもった忘れ物んぬしたき土産うこき一置いち取り行かにゃ』 ち置くふりゅうしちチットさがった。

目の前い黒い物が座ったもんじゃき 『はは一狸め土産に化かされち来たな』 すかさずきキセリう振りあぐるか叩きつけた。バサ音と共に逃げた狸 バッと回りが変わったごたるな一 道が一本になっち通い慣れた場所じゃった。『痛かったじゃろうがもう 化かしたりゃせんじゃろう』 さすが五助さん優しい。

それかる5日はずしち又こくう通った。狸がウロチョロしよるごたるが 今日道は一本道じゃき懲りたんか。頭んこぶはゆうなっただじゃろうかの。

★ 狸ん置物について一8相の縁起はこげな事らしい。笠一悪事災難から身を守る。目一前後左右に気くばり正しく見つめる。顔一世は広く愛想よく真をもって励む。徳利一恵まれに事足りるでなく徳は密かにつく。通い一信用から活動四通八達。腹一落ち着きながら決断力大胆に。金袋一金銭の宝は自由自在運用成せ。尾一尾わり大きくしっかり立身こそ真の幸福。

☞☞☞ 信楽焼き窯元の信楽狸八相縁起から ☞☞☞。



## 松根油も国の為

戦争が極限になっちバスも 木炭じ走る有様じゃき 坂道じゃ乗客は降りち歩く。どうでん歩けん人なんかは 乗っちょつてん コラエチモロウタ。松ん油も使うごつなり 夏ん暑い盛り女ごしやら 学生年寄りたちが手や足に すり傷こしらえち 松に傷つけちゃ流れ出るアブラを 次ん日に集めち回る。

松ん根を掘っち竹の内ん工場に集め ここじ炊いち『松根油』を絞り出す。必死ん取り組みじゃつたが そんな反面じゃ木炭焼きも 青年やら高等小学生が 卷脚絆姿じ長野山じする。勉強なんかは作業する生徒 こんめ一生徒は地区ごとに 集合勉強が広い寺、お宮、クラブ《現在ん公民館》 大けな家なんかを利用しち 先生が出かけち しょったもんじゃ。

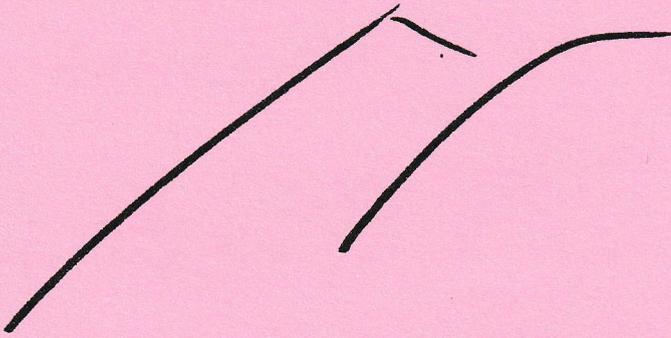
百姓仕事は女、年寄り、勤労奉仕ん青年なんかが。軍需工場にゃ朝早うかる歩いち行く。空襲どまあるとそこらん 防空壕、深え溝に飛びくうじ避くる。晩方まじ働いちテクテク歩いち帰る。兵隊の使う物かる食い物ん代用食、甘味料、学校んツボにゃ南瓜トイモが 植えこまれちもう足ん 踏み場もねえ有様。

『今朝寒いき木炭車か起こらん』 乗客は皆んな寄っちたかちセル。『せったしゃ乗ってんいいで』 運転手ん声じ乗りこむ朝ん風景。えーと走りで一たが馬力はねえ。トラックが走っちょるが ゆう見りゃ発動機が積まれちよる。石油じ走る音が賑やけえき ニワトリでん目を覚ます。大けな松にゃもしかすりゃ 今でんあん時ん傷が幹ん皮に巻き込まれち 僅かに残っちょるんを見ると 誠ち痛ましい。

戦争たゝ惨めなもん 人ん殺し合いじゃに 今日もどこかじ ありよるなんか悲しい事じゃが なんとかならんかのう。ふんと。



草花の服



## 神楽の練習した大峠

岡倉に神楽が入ったんが 明治の始め地元の小野実五郎が大野町かる伝承して帰る途中 大峠で供の人たちと練習をくり返して見て 一度そん手足舞い動作を確認。なんさま5日ばかり泊まり込みん 特訓じゃつたきおおかたわ覚えたもんの 細部についちゃ皆んながん 記憶う合わする他仕方がなかった。

いかに組合せち舞台を飾るか 一晩かかっち纏めあげた。そしち3日程グッスリ眠ると 近所ん若え者たちに ゆっくり教えくうじいった。そん頃じゃき若え者も多かつたし 楽しみん不足もしよった時 若いしたちん覚えも早えこと。そしち家んしたちも道具ん調達 衣装づくりそりゃもう絵がかり。

実五郎も私財をなげうつち おおかたシコが出来ると地区ん したちゅう招いち披露した挙句に 野津原郷ん郷社ん 野津原神社ん宮神楽としち 引き立てちもらい道具なんかん 支援も受くるこちなっち 春祭りん神楽が一番舞いち決まると 食事につく味噌汁にゃ必ず 酒粕いりとなっち 神楽舞も そりゅう何よりん楽しみにしちよつた。

春ん奉納が済むとお呼び舞台ん 神楽に各地に出かけたき そん頃ん 神楽舞いん若いしどま 若い娘たちん憧れん的にもなっちよつた。神楽につきもんの『ヒヨウシ』こりゃ 伴奏はつまり大太鼓、小太鼓、笛、鐘、なんかん鳴り物じり神楽どま こん太鼓ん音が村ん社かる 聞こえで一たらもう 夕飯食いよつたんが忙しゅカッコムと そこらへんに箸ゆ投げやっち ビラビラ飛うじ行くもんじゃき そん晩どま神楽見ん客が 帰り寄ったりもしよつた。

七瀬馬子歌から 神楽びょうしに更け行く夜は 濡れて  
見たいよ鈴ヶ滝 ハ 七瀬のせせらぎ  
サラサラサラサラ ホイホイホイ。

神楽が呼ばれて地方に舞う そんな人気も多くなっち 大分の  
の電車通りじ舞うたんが 大分じ観業博覧会があった時。  
時にゃ四国にも行くこともあったし 宇佐八幡宮ん『神楽  
大会』にも出場しち 年によっち『太鼓』が、他の年にゃ  
笛が入賞した事もあった。

春先ゃ百姓も忙しいけんど 行きゃご祝儀も土産も貰う。  
若い者ん元気さが舞台に 繰り広げらると拍手が鳴る  
もう見物人も神楽舞も一体となる そんなクライマックスに  
ゃ 終わって楽屋に入る見せ場どま いつまでん楽屋に入  
んじ 入りかけちゃ又 ヘモドッチ 太鼓叩きかもイライ  
ラ ダッチシモウチ 途中じ交替する一幕もありよった。

忙しい田んぼん仕事たぁ 家におるしがハリコム。そしち  
神楽に出ればお礼の収入も 小野実五郎も農村の厳しい  
暮らしに役立てばち英知を 巡らせた神楽はこげな背景に  
支えられ守られち郷土芸能としち 脈々と化粧されち来  
た。文化財でんあるじゃろう。

戦時中は舞う人ん少ないに 何回も交替しち務めたし 戦  
後は『子供神楽』も育った神楽。勇壮な神楽ばやしにゃ  
大人でん浮き浮きするごたる。苦難の伝承を自費を傾けた  
人間 常に人ん心ん中に生き続けた ふるさと神楽は太鼓  
笛鐘んリズムに 人ん真心が重なった時 故郷ん素朴な芸  
が 錦を着飾っち幸せを念じちよるごたる姿。

七瀬馬子歌の アイ と答えた神楽の里の あれも年頃目  
が可愛い ハ 七瀬のせせらぎ 小鮎が  
スイスイ ホイホイホイ。

## 故郷民謡『野津原音頭』

明治22年に諏訪村と合併して 野津原村も大分郡一になった。  
そしち時代も変わり婦人会も 姿勢のいい時代になっち 教職の人  
たちも参加する村おこし気風。そげな頃に三輪ノブが作詞した故郷  
民謡が人気を呼んじ 唄に盆踊りにと絆を広めた。昭和4年流行ん  
『紅屋の娘』ん曲に乗せた 故郷ソングん走りじゃつた。

息子ん道明がハーモニカん 伴奏に魅力もあっち 忽ち広がった  
。こん頃は東が胡麻鶴地区 西は坂を3段はず上った上詰。なんさ  
ま大分郡一広いき 詩を書くにゃ骨折ったじゃろう。が役員しん知  
恵も入った民謡は 楽器もままならん時代じゃき ハーモニカでん  
そん旋律はもう 人ん気持ちをがいと 魅きつけたな間違いねえ。

東は胡麻鶴 西は詰 サノ西は詰 東西3里の 野津原村《ソン》  
トサイサイ 野津原村《ソン》。

殿様時代の 野津原郷 サノ野津原郷 お茶屋の跡や 城の馬場  
トサイサイ 城の馬場。

春秋《シュンジュウ》賑わう 宇曾山 サノ宇曾山 霊験あらた  
な 虫封じ トサイサイ虫封じ。

胃腸によく効く 冷泉は サノ冷泉は 湧いて尽きない 塚野の  
地 トサイサイ 塚野の地。

河鹿《カジカ》の声や 螢狩り サノ螢狩り 流れも清き 七瀬川  
トサイサイ 七瀬川。

秋葉の山の 空高く サノ空高く 功《イサオ》を語る 忠魂碑  
トサイサイ 忠魂碑。

広さも富も 人口も サノ人口も 郡内一の 野津原村《ソン》  
トサイサイ 野津原村《ソン》。

郷土を愛せよ 村人よ サノ村人よ 家業に精出し 勤しめよ  
トサイサイ 勤しめよ。

ここにゃ8つの詩が 並んじょるけんど まっとあったごたる  
気もします。もし ご愛読者の皆さんで ご存じの方は ご連絡  
頂ければ 追加として後日 発行の方言集に挿入 申し上げます  
。今回の作詞者の 顔がアップされまして 老人施設では皆さん  
が さっそく歌詞カードを 作って愛唱され 昔日ん懐かしい  
頃を回想しているとか。心に染みこむ思いです。

野津原村では こんあと戦後になって 新しい『野津原音頭』  
が 三輪道明の曲に乗せて 隈井良幸が詩を書いて 愛唱される  
時代にもなりました。この曲にも振付が完成 盆踊りにも利用。

やがて今市村と合併と 施政環境も変貌の中じ 平成になると  
沢 沢野雅子の曲に 石原美希の詩が乗せられて 郷土民謡は次々に  
生まれち 愛され世に連れて 事前の中で歌い継がれています。

今回も熱心な愛読者が 施設で口すさんだ唄を 周りの人たちが  
聞いて 『ちゃー懐かしい うっとも 知っちょるわ』『そう  
な ちゃー嬉しい』 そんな輪が広がっち 調べよったら作詞者が  
浮上したと言う訳でした。高齢者が地区外で 懐かしがるのを聞  
く時 まだまだ調べて行く そげな必要も気がつきます。

肥後領地じあった 文化経済教育医療環境ん 優れた地域だけ  
にこげな 郷土民謡が花開かせ 人ん心を豊かにしちよつた そ  
げな思いもいたします。そしてこんな先人たちの 残してくれた  
心の資産を大切に 記録したいと思ひも 新たにしています。東  
は胡麻鶴 西はそうじゃ今市 荒木谷 になっちょるなえ。

野津原方言單語  
乙子ガリ



う…ウウタコ…大きな尻、大きな皮膚の瘤、足裏の固まり。  
ウウママ…追うままに、沢山な飯、大盛りのご飯。  
ウウスリヤ…背負わすれば、牛馬に荷を背負わせる。  
ウウメシ…沢山の飯、大盛りのごはん、大食いの食事。  
ウウキコス…追うからこそ、追われるからこそ。  
ウウセニヤ…荷を背負わせねば、牛馬に荷物を乗せる。  
ウウシイ…背負わせなさい、荷物を乗せて、荷を乗せ。  
ウウタコン…おんぶした子供の、子守のおんぶする様。  
ウエミーチャ…上向いては、上を向くと、上を眺めて。  
ウエカル…上から、上から見下ろす、飢えから。

ウエオーセン…植えるのに追いつかない、終わらない。  
ウエチャレ…植えてあげなさい、植える手伝いを。  
ウエチョキヤ…植えておけば、植えつけさえすれば。  
ウエジル…=植つけ田の準備、植え付けがOKに。  
ウエキラン…植えるのはできない、植え付けは駄目で。  
ウエクウジ…苗が足りなくなって、植えすぎて苗不足。  
ウエンシャ…上の方は、植えない人は、上司は。  
ウエダモ…植えた後の品は、植えた様子が見苦しい。  
ウエミーチ…上を向いては、目上の人には遠慮もする。  
ウエジリ…植え付けの終わりの方、植え付けの最後の。

ウエルリヤ…植えられれば、植えられるようになれば。  
ウエツギユ…植えた後の補植、植え不足の追加植え。  
ウエモタ…田植えする家の方は、植え付けの世話役は。  
ウエレンゴツ…植えられないように、植えるのが至難。  
ウエトウデン…植えたくても、植えたいのだけれど。  
ウエチョキヤ…植えておけば、植えれば半作出来た。  
ウエニン…上に乗せる荷物の、上の荷物は余分の儲け。  
ウエネキ…植えた側に、植えてすぐの時に、植える側。  
ウエヨコイ…植えた後にゆっくり休む、田植え休み。

う ウオサオシチ…目標がなくて、宛が定まらない、不安定な。  
ウオゲナシ…大人のくせに、大きい者なのに、知識人が。  
ウカバニャ…浮かばないと、出世しないと、人より上に。  
ウカンヤタ…浮かばない人は、背伸びしないと、目が出ず。  
ウカチユウナ…うっかり言わないように、失言は痛手。  
ウカレンジ…しょげていて、活気がなくて、しっかりして。  
ウカンジョケ…浮かんでいなさい、浮いて弾んで、活気を。  
ウカツンカオ…うっかりした事を、用心して油断せぬよう。  
ウカンウカン…浮かばないが、思い通り行かぬ、目が出ぬ。  
ウカリナエ…合格しなさいよ、採用されるとよいが、OK。

ウカッチョル…合格している、無事採用に、願いが叶う。  
ウカンジョル…浮かんでいます、浮いているから、太平の。  
ウカブリャ…浮かべて、浮かして見ると、平穩無事。  
ウキアガッチ…浮かび上がって無事、上がって来たから。  
ウキシノ…浮いた側から、浮いたと言うのにすぐ。  
ウキネキ…浮いた近所に、浮いた近くに、浮いた側に。  
ウキトデン…浮きたくても、浮きたいのに邪魔が、邪魔扱。  
ウキウキショル…弾んで、楽しい雰囲気、気分爽快。  
ウキヤガッチ…浮かき上がって、無事に浮かき上がった。  
ウキユドチ…受けようと思って、受けるので、引き受けた。

ウクウク…浮きますよ、浮いている、浮かき上がった。  
ウクルマジ…受けるまでは不安、うけるので心配なく。  
ウクンノカ…受けるのですか、受けてもよいから、引受け。  
ウクドチ…受けようと思う、受けてもよいので。引受準備。  
ウクネキ…浮いた側から、浮かき上がる側、浮いた周りに。  
ウクナァ…浮くのは、浮いたので、浮くのは当たり前で。  
ウクルキ…受けますから、受けてもよいので、引受けます。  
ウクルリャ…受けられれば、うけられると思う、引受ける。  
ウクンノン…受けるのも、受けるのはよいが、考えてから。

う ウクマジャ…浮いてくるまでは、浮くのを待って、浮くまで。  
ウクヤター……浮いてくるのは、浮いたのなら、浮いたなら。  
ウクソベ…浮いた側に、浮いてきたので側に、浮くを見て。  
ウクンナイガ……浮いたのならよいが、浮くだろうか心配。  
ウクルドチ………受けるので、受けますから、引受けました。  
ウクンネキ………受けた側から、受けたまではよいが苦情が。  
ウクルワキ…受ける側から、受けた側から小言も、苦い決断。  
ウクンノン………受けるのも考えないと、受けたはよかったが。  
ウクリャイイ………受けておけば何とか、折角だから受けたら。  
ウケチョリャ…………受けていれば、受けると嫉妬も考えて。

ウケハタン………受けたまま無理なよう、受けたまではよいが。  
ウケレメーガ………受けられないのでは、無理に受けても後で。  
ウケカトウ………受け方の責任を、受けたら最後までしないと。  
ウケテンチ…………受けても責任を、受けた以上は最後まで。  
ウケカブリャ………受けて大損すれば、赤字覚悟は出来ているか。  
ウケトウデン………受けたくても、受けたいのに、受けきらない。  
ウケノウチ………引き受けた迄はよいが、受けた以上は責任も。  
ウケルリャ…………受けれるなら引き受けて、最後まで責任を。  
ウケタナイガ………受けたものの大丈夫、世話はないですか。  
ウケワキュ…………受けた儲けの分け前を、無理のない分配を。

ウケチョキヤ…………受けておけば、受けて加勢するのも。  
ウケソコネチ…………大損も承知の上で、考えての交渉を。  
ウケソコノーチ………受けて大損も覚悟の上で、利益追求考慮。  
ウケンコター…………受けない事もないが、はっきり意志表示を。  
ウケドク…………受けたために思わぬ利益、用心する思慮も。  
ウケドン……………思わぬ失敗もある、損も儲けの始まり。  
ウゴカシャ…………動かすと、移動させて、動かす事で発見も。  
ウゴコドチ…………動きそうだから、先を見極めて、動きに用心。  
ウゴケレンガ…………動けないですか、動けないようなら。

う ウゴメイチ……動いているよう、動きだした、動いている。  
ウゴケーター……動かした、移動させて、動かすと。  
ウゴケンカン……動けないかも、動くのは難しい、動けぬ。  
ウゴカンゴツ……動かないように、動いてはいけない。  
ウゴクメー……動かないだろう、動かすのは無理。  
ウゴイタケンド……動いたけれど、動くけれども、動く。  
ウゴイチョル……動いている、移動したようだが。  
ウゴカニャ……動かないと、移動しないと、動かさないでは。  
ウサギミチャ……細い動物道、人だけが通る小道、勝手道。  
ウサユウナ……嘘はいけないよ、嘘言いは信頼をなくす。

ウザッター……湯がいて料理、湯でて食べる、湯を使う調理。  
ウザル……暑苦しい、暑苦しくてたまらぬ苦痛、猛暑の辛さ。  
ウサーバルル……嘘はいずれわかる、嘘つきは泥棒の始まり。  
ウシロベレ……後ろ側に回って、後ろ側には、後ろ姿。  
ウシログリ……なにか隠した行動、内緒にしている行動。  
ウシロベタ……後ろ側、後ろに回って見れば、裏側の姿。  
ウシロミーチ……後ろ向いて、後ろを向いてみる。  
ウシルミレ……後ろを見なさい、後ろ側に用心、後ろの確認。  
ウシロベッピン……後ろ姿が美人、後ろスタイルが格好よい。  
ウジャモジャ……沢山な状態、多くの物が密集して。

ウシロバタ……後ろ側、後ろの方で、後ろ側の状況。  
ウシンヒトツキ……牛は性交が瞬時、瞬間の行動、敏速。  
ウシロベテ……後ろ側に、後ろの方に、後ろに用心注目。  
ウジュマクル……威圧を感じる、意気込み、準備完了。  
ウシイナヨキ……薄いのは敬遠、薄いのは心配、薄いのは程程。  
ウズウズ……落ち着かない状態、怖さも感じる状態、不安定。  
ウズムゴツ……駿足の音、澄み切った音、瞑想する音程。  
ウズウジョル……駿足に回っている、威圧的な静音。  
ウスムリャ……薄めると、薄めて使う、薄くする事で効果。

う ウスグロージ…薄暗くなって、あたりが少し暗くなって、夕暮。  
ウスモチャ…白でついた餅は、白で丁寧についた餅の味。  
ウズガイー…むずむずして痒い、気持ちの悪い痒さ、痒さ。  
ウスウシテン…嘘をしても、誤魔化しても、だましたとしても。  
ウスズミュ…薄い墨を、薄くすった墨、ぼかした墨色。  
ウズキデーチ…ずきんずきん痛む、刺激のある痛み。  
ウズンジョル…真剣に回っている状態、微音をたてながら。  
ウズリャウメー…ゆがくと美味しい、ゆがく事で味が引き立つ。  
ウゼテン…ゆがいても、ゆかけば食べられる、ゆかけば。  
ウセデータカ…荷物を運びだしたか、牛馬で運び出す。

ウセカトヤトエ…荷物運びを雇えば、運びだしを雇ったら。  
ウセタナショワネエ…牛馬に乗せたのなら大丈夫、荷運び準備。  
ウセコンヒトカルイ…人間のかるった分、背負い出来るだけ。  
ウセツクリャニイル…おんぶすれば寝る、背中で寝入る。  
ウセダシャ…牛馬で運びだせば、運び出す荷物なら。  
ウセタラモドレ…背負わせたら帰れ、荷物積んだら帰れ。  
ウセチョキヤ…背負わせておけば、荷物を乗せておけば。  
ウセチミヨ…背負わせて見れば、荷物を積んだら、乗せて見よ。  
ウセダシャ…運びだせば、荷物を運んで出せば、荷物を送れば。  
ウソハッピーク…嘘吐きの常習犯、嘘で固めた論議。嘘並べ。

ウソタクリュ…嘘ばかり並べて、嘘の得意な心貧しい性格。  
ウソンマコチナル…嘘が誠になることも、嘘が本当になって。  
ウソバガエエラシ…親しらずが可愛い、口から覗いた歯。  
ウソゴタムリ…嘘はすぐばれる、嘘では理屈が通らない。  
ウソチュウタンカ…嘘であったよう、嘘芝居で誤魔化した。  
ウソナンカユウナ…嘘は言わないがよい、嘘では損をする事に。  
ウソヌリャメダツ…誤魔化してもすぐばれる、人の目は鋭い。  
ウソマジャユウナ…嘘は言わないが花、誤魔化しても得ならず。  
ウソソカワハグル…化けの皮はすぐはげる、鍍金はすぐはげる。

五助馬子唄街道ばやし…『したかろーのう』

『いっぺんさせんかのー』『チャーリャトツバ言うちゅうたら』  
若い娘たちん集まった所じ 青年どまが話ん中に入ち待てれんのか口火う切った。『もう ずっとしちよらんき』『そげーしちよらんのムゲネコサレ』 相手がおらんと出来ん事だけに気持ちもゆう解る。それかち誰でんいいち言う訳にもいかん。

『お前どういつ頃覚えたんな』『たしか15ん時かな』『や…あそげー早う覚えたんな』『あんしが無理教えちやるち言うきなえ』『よかったじゃろうのー』『それがハジメン内あ訳も解らんじな』話が弾むと 近所ん若えしも集まる。『おどーも18ん時せんかえち…』『それじ覚えたんか…ふんといいのー ほんな俺だけがまあ 覚えちよらんのか』

『こん前 二人じしよったじゃろう』『あん時 見たんな 油断ならんな』『障子ん影かるチラット白いもんが ゆう見たら足ん先がの』『無理しゅうえち言うもんじやき 仕事も一段落ちーちな』『どげーじゃつた』『やっぱ相手がゆうねーと』『そりゃまーそうじゃろうのー』『けっくしゃよかったわな』『げどーもう』

『はじめにゃ指じユウ撫でチョカント ソソライイ所もあっち』『上はゆう出るけんどのヤ下がなかな』『年中しよらんとやっぱ難しいんか』『明りいのも目の為にゃ悪いごたるし』『贅沢じゃのう それじ近ごろ競争があるち言いよったが』『それで 年末ん土曜日かな』『いっぺんしゅうや…させんかのー』

ちよいと考えよったが…暫くして『ほんな読み札だけでん貸すき勉強しちよきなー』………天の原ふりさき見れば 春日なる 三笠の山に出でし月かも………百人一首は文学高貴な遊びじゃが 覚ゆるまじひと苦勞もあるが妙味もあり。



うーウゾウムゾウーたくさんいろいろ集まる、雑多に寄せ集め。  
ウソナリヤコトワレ………嘘だったのなら断わらねば。  
ウソナキヤ………泣き真似、嘘泣きしないほうがよい。  
ウソゴタスンナ…作り話はよくない、誤魔化しはいけない。  
ウソマジスンナ………嘘までしなくても、見せかけでは。

ウタチゲネエ……汚ならしい、見かけが悪くて、不潔な様。  
ウタグレウタエ…歌たけても歌ったら、歌の一つくらいは。  
ウタカルキチヨクレ……歌は任せて、歌なら負けないから。  
ウタジリデバン…歌はしんがり、歌は終わりでよいから。  
ウタスリヤイチバン…煙起こしは得意な仕事、早く上手に。  
ウタセチヨケ…起こさせておけば、打つのなら得意のはず。  
ウタルリヤタタケ……叩かれたら叩き戻せ、仕返しも作戦。  
ウダッチョル………茹がけている、茹であがっている。  
ウダラニヤ………茹がけないなら、茹であがらなければ。  
ウダウダスンナ……のんびりのんびりするな、しゃきっと。

ウチュソチ…内の事より外を優先、どこが自分の家か心配。  
ウチアガッチ…火災で燃え上がった刹那、最盛期になって。  
ウチマタコーヤク…どっち付かずの上手者、要領のよい人。  
ウチウチジ……内々で済ませる、略式の行事、家族だけで。  
ウチモソトモ………あらましの性格、内も外も同じ感覚。  
ウチカテー……内の家に、こちらの方にどうぞ、私の家に。  
ウチガオソトズラ………家庭ではうるさいが外では別人。  
ウチマワシャ……叩き回すと、乱暴して困るが、暴力は悪。  
ウチンコチー……私の家の事で、こちらの事に口出し無用。  
ウチオコセ……力で起こす、乱暴に耕す、深く掘り起こす。  
ウチカトウ………内の家を、私の家の方に、私たちの家も。  
ウチペロー………内側を、内部の分を、中の部分を。  
ウチクウジシモウタ…打ち込んでしまった。打ち込み過ぎ。  
ウチ………内側、私、紙製の子供の遊び用具、ビタ。

ウチュソチ…自分の家は構わないで、外での世話をよくする。  
ウットマジ…私までも、私にもですか、私も貰っていいの。  
ウッタテブシン…俄か修理、応急手当て、あり合わせの修理。  
ウツイチョキヤ…寝ついておれば、腹ばいに寝たよう。  
ウッタテチ…宛布での修理、繕いが出来て、あてがえもよい。  
ウツツル…捨てる、乱暴に捨ててしまう、無造作に捨てる。  
ウツニャハエ…打ち起こすには早い、寝せが足りぬ。  
ウットガン…私の物です、私の、私の使わないで、私物です。  
ウツナアメンアト…畑起こしは雨の後が土が柔らか。  
ウツツラウツラ…夢うつつの心境、白河よぶねの有様。

ウットデンイイ…私でもよいですか、私でも間にあいますか。  
ウツソバカル…起こしている側で、起こしたかとおもうと。  
ウツネキ…起こしている側で、畑耕しの側で、起こす足もと。  
ウットドーモ…私たちも、私たちみんなも入れて。  
ウッタチ…当てて、当てぬのが繕いになる、旨く補修する。  
ウツツカツツ…やっとうどうやら、どうやら間にあいそうで。  
ウツツタンカ…写ったのか、移ったのですか、映ったよう。  
ウツブシ…腹ばいになって、腹ばい姿で、腹ばいの楽な姿勢。  
ウッタテチョキヤ…当てておけば、合わせ当てる事で。  
ウツプタル…捨ててしまう、乱暴に捨てる、邪魔で捨てる。

ウツポタル…捨ててしまう、邪魔物は捨てて処分する。  
ウデタラクウ…茹でたら食べなさい、茹でたらどうぞ。  
ウデチコスウメ…茹でたら美味しい食べ物、茹でて食べて。  
ウテナカワレ…撃ちないなら交替、打てないなら変われ。  
ウテタブンナヤル…起こした分はあげます、起こして貰う。  
ウテヤ…打ちなさい、起こしなさい、撃てば結構。  
ウテヨセン…起こしきれないから、起こす時間がないので。  
ウテングタリヤ…起こしきれないなら、起こすのが無理なら。  
ウテタナ…起こしましたか、耕したようですね。

ウテルリャ……撃てれるようなら、打てるようなら、耕せば。  
ウデチョケ………茹でておいて、茹でたら美味しいから。

ウトガヘーチョル…中が空になっている、空間が出来ている。  
ウドム………急速停止状態、停止しているように回ってる。  
ウトウチョリャ………歌っていれば、機嫌よさそうな雰囲気。  
ウトウチートル…歌って通る、機嫌よく通る、いい事ありか。  
ウトニナッチ……中が空になっている、中が巣抜けになって。  
ウドンゲンバナ………うすばかげろうの卵の生み付けた場。  
ウドンバチュ………うどんを入れた鉢、湯つけうどんの鉢。  
ウドマニャ………澄み切った音でないと、集中する音でないと。

ウナドマ………お前たちは、あなたたちは、あんたたちは。  
ウナッチョル………凄い音だけど、澄み切った音だけど。  
ウナランデン………凄い音でなくても、妙音でなくても。  
ウナメデン…雌牛であっても、雌牛でもよい、無事なら結構。  
ウナジーテン………頷いても、頷いたれけれども、返事なのか。  
ウナミュ…お前を見なさい、自分を見直しては、自分発見を。  
ウナリヨル………凄い音がしているが、妙なる音が響くように。  
ウナロージョチ………凄い音が出そうで、轟音が聞かれそうで。  
ウナラシイ………すごい音を出させて、もの凄い音が出たよ。

ウニャヒイタカ………敵は引きましたか、敵を引いておいて。  
ウニユヒク………敵を引きましょう、敵を引いて、敵も引いて。  
ウニユヒロギー………敵を広げなさい、敵をひろげておいて。

ウヌシドマ………お前は、あなたならば、あんたたちは。  
ウヌシャイカンカ………お前は行かないか、あなたは行かない。  
ウヌドマ………お前なら、あなたならばこそ、あなたでならば。  
ウヌデン………お前でも、あなたでも、あんたなりゃこそ。  
ウヌナリャコス………あなたなればこそ、お前なればこそ。

ウヌカル…お前から、あなたから、お先にどうぞ、早く言つて。  
ウヌジャキ…お前だからこそ、遠慮ないから言うが、あんたに。  
ウヌガワレ…お前が我なら我も我、遠慮ない仲間どうし。  
ウヌカタン…お前の家の、あんたたちの家の物は、あなたの。  
ウヌシラー…お前たちは、あなたたちは、あんたたちの。  
ウネモタァ…敵の側にも儲けの種がある、敵を大事にするが鍵。  
ウネドマ…敵こそ大事な床、敵をきちんとすれば作も豊作。  
ウネジャキ…敵なればこそ作も豊作に、土こそ作物の根幹。  
ウネンワキ…敵の脇に思わぬ収穫もある、敵引きは大事な仕事。  
ウネグレ…敵と簡単に言うけれど、敵引きで収量も差がつく。

ウネナリヤ…敵引きをよくしないとおかしい、見かけも大事。  
ウノミヤワリー…早合点すれば大事、落ち着いてよく考えて。  
ウノコッチョ…そんな事へいちゃら、朝飯前だよ、平気の平座。  
ウビーチュウタ…水をいれなさいと言う、湯加減をよく見て。  
ウブリヤ…水をを入れて湯加減をよくするので、うすめて。  
ウブルキヘーレ…湯加減よくするから入ったら、湯加減よし。  
ウブンナイイガ…水を入れてもよいが、入れすぎは緩くなる。  
ウブルグレーカ…水をを入れて湯加減をよくして、折魚の入湯。  
ウヘアワスリヤ…植えるのに合わせて混植する、一緒に植える。  
ウベチャルキ…水をを入れて湯加減をよくする、少し待つて。

ウベテンイイ…水を入れましょうか、水を追加して。  
ウベリュウカ…水をいれましょうか、熱かったら水を入れて。  
ウマカロウド…美味しいと思います、格別の味がします。  
ウマカッタ…美味しかったので、味付けが上等、手際がよい。  
ウマイグレー…上手に言い含めて、調子よく合わせて話す。  
ウマンションベン…色が付いているだけの茶、薄いお茶。  
ウマカリヤ…美味しいなら、美味しそうに食べるのなら。  
ウマグイ…馬のように沢山食べる、大食いする人の様子。  
ウマツロ…馬のように長い顔、顔表が長い人、千差満別。

ウマニャー…いろんな食材で煮付けしたもの、精進料理の一つ。  
ウミンモンカヤマンモンカ…出所のわからない物、住所不定。  
ウミヤハヨダセ…化膿したものは早く絞り出して、廃物は。  
ウミダテン…生んだばかりの、生まれたばかりの子供。  
ウミタチュ…生んで間もないもの、生んですぐの状態。  
ウミソコネチ…間違えて生まれたもの、違って生まれたもの。  
ウミダチデン…生んだばかりでも、生まれたすぐの状態。  
ウミトデン…生みたくても、生みたい希望があっても。  
ウムラカシャ…蒸して見ると、蒸して保存すれば。  
ウムシタ…鶏の抱卵、蒸したから、蒸してありますから。

ウムンナハエ…蒸せるのは早いから、蒸してみるとすぐ。  
ウムシチータ…鶏が抱卵、どうやら妊娠したようだから。  
ウムレタカ…蒸せたようにある、蒸せたら食べなさい。  
ウムシチョキヤ…蒸しておけばすぐ間にあう、蒸して準備。  
ウメタンカ…蒸せたのなら、蒸せたならたべましょう。  
ウメーナシツ Chol…美味しいのはよく知っている、食感。  
ウメチョキヤ…埋めておけば、埋めて保存する、仮植えに。  
ウメタヌ…熱いので水を入れる、埋めた場所に追加する。  
ウメーナダマツョケ…美味しいのは黙って食べておく。  
ウメウチャ…埋めて一緒に耕す、埋めて雑草も肥やしにする。

ウメモンナ…美味しいものは黙って、美味しいものは早めに。  
ウメモドシュ…埋めて耕し雑草も肥やしに入れる。  
ウモウデン…美味しくても知らぬふり、美味しくない表現で。  
ウモクヤサカシイ…美味しく食べると元気が貰える。  
ウモウクウナ…美味しく食べない変わり者、感謝しない。  
ウモウノウデン…美味しくなくても上手に、感謝の気持ちが。  
ウモウヒイチョケ…馬を引いて、馬の手綱を取って。  
ウモレデン…埋もれても。埋まっても、埋もれてしまったが。  
ウモウウッタ…馬を売ったので、馬を売って買い替えた。

ウヤムエスンナ…そのままになってしまうかも、結果不明に。  
ウユルトキニャ…植える時には、植える場合はきちんと。  
ウユリャコス…植えておけばこそ、植える事に意義がある。  
ウユンナイイガ…植えるのはよいけれど、植える意味を。  
ウユルゴタリャ…植えるのならば、植える事を鮮明に。  
ウユルネキ…植えている側で、植える周辺に、植え場所の。  
ウユルソベ…植えている側で、植えている周辺の。  
ウヨウヨシヨル…回りに多くがうごめく、沢山集まっている。  
ウランチュウニ…売らないと言うのに、売りませんよ。  
ウラナリャ…先の方に実っているもの、最後に実るもの。

ウランクチガアク…裏側の戸が開いて、裏本戸が開いたよう。  
ウラモアラァ…裏表があるもの、二重人格、影の姿。  
ウランジコスヨケレ…売らなくて、うっかり誤魔化しに。  
ウラムニャハエー…恨むのは考えて、誤解のないように。  
ウリネガイイド…高値がついたようだが、相場に注意して。  
ウリメートン…売らないから、売らないと思ったが。  
ウリテーチャ…売りたいから、売値がよいから決断して。  
ウリデーチャ…売り出したよう、うる機会かも知れない。  
ウリュウトン…売れなくても、売れたら売れたで。  
ウリソコネチ…売る機会を失って、欲の張りすぎが損に。

ウルソバカル…売っている側で、売ろうと思う刹那に。  
ウルリャ…売れたなら、売れたとすれば、熟れたらあげる。  
ウルンヌマテ…熟れるのを待ちなさい、売れたら分け前。  
ウルリャコス…熟れたなら、売れたとすれば、売れたかな。  
ウルネデン…売値でもいいから、売値で取引、売り時かも。  
ウルメーチ…売らないと、売りませんよ、売らぬ覚悟だが。  
ウルルマジ…熟れるまで、売れるまで、売れてから。  
ウルントン…売るとも、売らないとも、売るつもりはない。  
ウルコター…売る事はないから、売るつもりはない、売らぬ。

西  
區  
文  
學  
研  
究  
會

『ひきのべ、ひきまめし』

盆にオバンカテ行ったら 『まゝ上がりゃいいに セワシ  
インカ』 『インゲ忙わしゅうはねえで』 久しぶり来た  
甥っ子 何か言いてえんじやろう。ぼちぼち暑うなったき  
『ひきのべ』でん食わしゅう。『おかちゃんな 元気な』  
やっぱ娘が気になり 苦にもなるんが親心。

アガリクチかる上がっち ないしょに行くと 裏かるん風  
が涼しい。『こかゝいつ来てん 涼しいなあ』 『じやろうが  
夏ん涼しいな なによりんゴツソウジャ』 横に ごろっと  
上う見上げたら フスボッタ天井ん横木が 頑丈に縄じ竹を  
クビリツケチ ビクとんせんごつなっちよる。

こね鉢じ粉をこめるとチョコット ふきんをかくると休憩  
しに 上がっち座った。『茶を飲むな』『いらんで』『髭が  
生ゆるか』『……』 年頃になったきチッタ 考えよるん  
じやろう。戸棚かるきな粉をだすと 『ひきのべ食うな』  
『うん』 無表情に返事すると 起け上がった。

『ばあちゃん』『なんな』『いくつになったんな』『やあ  
歳か』 急に言われたもんじゃき 『ありゃワシャ幾つに』  
ちよいと考えるうだ。孫はニヤニヤ顔じ 『ちゃあら 自分  
がな歳う忘れたんな』『なにや オロイヤッジャノウ』  
それは腹立ちまぎれじゃねえ 本当は嬉しかった。

『61じゃねえ 還暦ち言うんで 今日が誕生日』『やあ  
そうじゃつたのう』 二人は顔見合わせち大笑い。娘が知恵  
づけしたんか それとん こん子が調べちよつたんか。ゆう  
気づいたもんじゃち ホロリ目頭が熱うなった。『じゃき  
あい お誕生日祝い』 差し出した小さな包み箱。

『ウットオニえ』『中身はタイシタコタ ねえけんどな』  
『インニャもう そんな気持ちが嬉しいき』 押し頂くと神棚  
に供えた。子供なりにソリュ見ると 母親もユウそげなこっ  
しよる。クスッと笑いとうなったぬ エート堪えち『元気じ  
フガイイナァ』 大人みたいなコツウ言うに イチベ胸に  
ジンと来る。

粉が具合う寝たきい 手じ伸ばしちゃ沸いた湯に入れる。  
目を シバタタケーチ 煙て一ぬ堪えたんか 甥子ん情愛が  
こみ上ぐるんか。『ふんとケムテーノウ』 『手伝おか』  
『しちみるか』『……』 黙ったぬみると ヤッパ無理じ  
ゃろう。そうこうしよる内 ひきのべが 出来上がった。

あげショウケに広ぐると きな粉に黒砂糖まぜあわせち  
コネ鉢ん中じマメスと 出来上がり。オテショに盛ると香り  
が そこらへんに広がる。『はいコリュウ仏様にあげて』  
『あい』 ヒョコヒョコ調子ゆう 運ぶ姿が母親うつしじ  
思わず 吹きで一ちしもった。

食べながら 『ひきのべ』と『ひきまめし』は どげ一違  
うんな『そりゃなあ』 祖母もこげな若いもんから 聞か  
ると何か もう嬉しゅうじ座り直した。

『今食べよるんがまあ『ひきのべ』じゃが『ひきまめし』  
は こんひきのべに 小豆餡を塗っち作るんが ひきまめし  
になる』 小豆は炊くと増ゆるき 米を大事にしよった百姓  
は なるたけ使う工面ぬ考えた。形が崩るるまじ煮ち ちっ  
と甘味ん蜂蜜やら 干し柿やら 黒砂糖やらじ 餡をこさえ  
た。

そんな小豆も畑を利用したり 田の畦に植えよった。畦ん  
分は『小作ん計算に入らんき 儲けん分ちゅう訳じやった』

『そげ一苦を見よったんじゃな』 米が経済ん基本じゃき小作米を納めち 残りは売って生活の足しにする。じゃき小豆が代用しよった。おおもと貴重品じゃが『増ゆる』それが何よりん魅力 おまけに美味しいと来ちよりゃ 鬼に金棒じゃった。『餅ん餡にしち売りゃ よかろうに』『それが餅米が高えし出来も悪いき 世の中うまく行かんもんじゃな』

『それじ ひきのべと ひきまめしが 違う訳じゃつたんか今日は ひとつ勉強が出来た。オカチャンな知るめ一かな』  
『いゃー知っちよるじゃろう あん娘はイエモチが よかったき』『ふんとう それじケチじゃな』『そげ一ケチかえ』  
『うん一こしいで一 なかなか小遣いくれんに』『そんなわり貯めちやるわい』 大笑いする二人に 母親は足ん裏が痒かろう。それとん親が認めちくれたち 満足しちよるかな。

『こんだ来る時にゃ ひきまめしう 作るかな』『無理せんでんいい』『本当は食べてえんじゃろう』『まゝな一』まだ子供じゃ とうとう本音をはいたわい…還暦ばあちゃんも 久しぶりん子供とん やりあい刺激されたごたる。百姓ん知恵は生活かる滲みでちよるかる 臨機応変に使い分ける 英知にも発展しちよるごたる。

きな粉を使う盆の食べ物にゃ 仏様との関わりも多いよう。『ひきのべ』地域じゃ『やせうま』とん言う。きな粉には相手と固まりゃ ちぎれんごつん強さがあっち 地獄じ苦しむ人たちに 盆の食べ物としち届くるに 結んだ食べ物んが こぼれ落ちる事がないからち きな粉を使うようだ。

夏の暑いさなかじゃ きな粉は涼感も呼ぶち 夏料理に使う心くぼりもユウ解る。食欲んねえ時ん刺激にもなるとか まさに料理んつわものかん知れん。



## 『賀来善神様ん旗立て』

9月に入ると賀来ん祭りが始まる。郡内ん大けな祭りは当時ん 農村じゃ待ち望んじよるごたる。そこにゃ五穀ん豊稔あり無病息災あり。村ん辻にゃそん『幟旗』も立てちみんなじ無事な秋を迎えたもん。若いしたちん行事でんある 旗立てにゃ総出ん楽しい日でんある。

そりゃただ飲み食いだけじゃねえ 心んふれあう機会かん そこじ新しい情報も交換出来る。若者らしい嬉しい話ん披露も出ると 悔しさと嬉しさが交差もする。『えーと済んだきニワトリ飯じゃどげーか』『いいのう俺方にゃアレモアルキ』 皆んなん顔が崩れち笑顔。

束の間ん楽しい一時が 汗も仕事ん苦痛もしばしお別れになる。放し飼いん鶏うツカマエチ うまいもんパットそん早業。ゴボウ ニンジン あり合わせん具材を混ぜち男料理たゝ乙なもん。鍋ん底に出来たキツネ色ん コガレに近所ん子供がかぎつけち 集まる。

鶏飯ちゃご馳走でんある。そうそうにゃ食わん田舎料理じゃが こげな若さん中かゝる 醸し出す素朴な味に青春が描かれち 順送りん農村の四季は移動し 風習も伝承されちも行くもん。豊作を念じた心の中の素直な 行事は神仏の存在にも関わる人間の 赤裸々なしきたりかん知れん。

シケガナカリャモウ豊作。最後まじ気は許されんが 後は天に任せた根性がやっぱ 取り入れまじ味方しちくれたごたる。『やんかた秋祝言なら こん冬は温いのう』『お前も来春じゃねえか 辛抱しよ』 不安と嬉しさが交差す若者も 予想以上ん美味しいご馳走が すぐそこにある。

戦争が激しゅうなっち食い物んも 厳しい時代が続きよると 人間の知恵はケックシャ働くもん。小麦う粉にする時ん粕がコカスち言う。これも小麦ん端くれに 間違いねえ食い物んじゃき『小粕ダンゴ』に 結構食えるもんじゃ。ちった喉うコサイジ通るけんど ひもじいな変えられん。

米糰でん食われたもんじ 時たまん代用食にゃ間にあうもんじゃつた。そん代わりチッタ 小石どま飛びくうだんか 歯にガジィ クルットひんのみゃ はい終わりちゅうこちなる。『といも』どまもう 代用食ん王様じゃき どこでん大手を振っち罷り通る。

葛ん根を掘りあげち臼じつく 水じ曝すと澱粉が取るるが こん乾かしたぬ餅にすりゃ 誠ちウメーもんじゃつた。そりやゝギチギチした食感 手間取るだけあっち 貴重な餅が出来あがる。地主さんがゆうしちくるる そん優しい地主さんが病氣ち聞く。見舞いに行きたいけんど 何さま貧乏じ持っち行くもんがねえ。

嫁ごと相談の挙句に心がこもっちょりゃち イビラを掘りあぐると水に曝し 『イビラ餅！』う作っちきな粉まぶし『恥ずかしいけんど』ち そっと差しでーた。地主さんそん真心こめち作った餅に 涙流しち苦さを堪えた笑顔。誠ん心が通じたそん餅は 金をかけ贅沢な味よりも 勝る情愛の味ち男泣きしたち言う。

それに苦さが刺激となっち 病氣が不思議とゆうなったき こんだ地主さんが お礼にわざわざ土産持参じ来る。人ん心に込められた豊かな 人間愛は物や金では 割切れん高価な宝物が込められちよるんと。地主さんも小作人も 幸せを 分けおってん縁先ん話ん 笑顔が美しかった。

★★★ 方言説明 ★★★

- 35 P オバンカタ…お婆さんの家。インゲ…いいえ。オカ  
チャン…お母さん。ないしょ…茶の間。こかぁ…こ  
こは。じゃろうか…てしょうが。ゴツソウジャ…ご  
馳走。フスポッチ…ふすべられて。ビクとん…動か  
ない。チョコット…少し。いらんで…いりません。  
チッタ…少しは。なんな…なにです。やぁ…はい。  
もんじゃき…ものですから。ちゃーら…あらまぁ。  
オロイヤツジャノウ…根性の悪い人。したんか…  
しましたか。それとん…それとも。じゃき…ですか  
ら。
- 36 P うっとお…私。インチャ…いいえ。ソリュ…それお  
。フガイイナ…運がよかった。コツウ…事を。イチ  
ベ…よけいに。シバタタケーチ…まばたきして。ふ  
んと…本当に。ヤッパ…やはり。そうこうしよる…  
そのうちに。ショウケ…竹で作った生活用具。オテ  
ショ…小皿。じゃき…ですから。
- 37 P じゃなぁ…ですね。それじ…それで。イエモチ…経  
済家。こしいで…賢い。こんだ…この次は。まぁな  
…本当は。ごつん…ことの。つわもん…知恵者。
- 38 P じよる…なっている。どげーか…どうですか。アレ  
モアルキ…内緒ん品物。パット…見る間に。コガレ  
…おこげ。存在に関わる…心の中に意識する。シケ  
台風など天災。やんかた…お前の家は。





五助

物語

天領石合は豊臣時代ん検地《1594文禄3》かる 岡領  
になった後ん江戸期に入っち『天領』になった。石合ん中で  
ん主に北側ん『上石合地域』じ 屋形木、片草、なんかがそ  
ん中に入る。こん地域にゃ『ろくろぎ、やかたぎ』 なんか  
木材に関わる地名が多いが かつての山林職が天職じゃつた  
んか 集落がそっくり移転した説もある。

由緒も伺える伝説として高貴な姫の 墓地があって埋葬の  
直前に朱漬けして 遺体の安泰を念じた説。お供と7基の塔  
もある。刻まれた文字から右大臣と読み取れ 大神一族に関  
わるかもと推察さるる。若くして世を去った娘の 親心が汲  
み取れち哀愁もそそる。

地区 ン家かる高野山竜光院発行ん 通行手形があり《17  
96年》阿蘇や高千穂に 旅する為の手形のよう。身分もさ  
ることながら 手形を持参しちテクテク歩いた 昔ん旅姿が  
忍ばるるんも夢とロマンがある。ここん家は庄屋さんじゃつ  
たよう 大野地域ん大神ん流れを汲むんか。

今市かる久住に行く街道かる 天領にゃチョコット外るる  
道にあるが これも外敵かる被害を防ぐ事い 気配りしたん  
しゃろう。元々は幹線じゃつたけど 街道作る最中に直線  
にするたみ ちっと避けたのん仄かん色気も伺えた。五助さ  
んな主に人家んある所う通るが 用んねえときゃ馬が心え  
ち 近道う通るなんか 愛らしいじゃねえな。

こくう回っち片草ん地蔵様に出た 地蔵菩薩《1740》  
野仏じ大衆ん 悩みを救ってくれた。手に宝珠を持ち参拝する  
人が多いじ 難渋する人たちを救う己は 雨露に曝されても  
衆生を救うんじ 特にこん地蔵にゃ南無ちつけち 南無地蔵  
菩薩ち呼んじょるんも 親しみがあるごたる。

★ 方言説明

- 38 P 連れのうち…連れになって。まじん…までの。おけた…満腹になった。こきー…ここに。トラマエタ…捕まえた。ドッサリ…沢山。
- 39 P とん…との。のうでん…なくても。かたくりぜんざい…葛粉を使って簡単に出来るぜんざい。こげなふうに…このような方法で。こちなるき…事になるから。そうしち…そのようにして。けっくしゃ…結構、予想以上に。みたんじゃろうな…見たのでしょうか。デー道…平らな道。
- 40 P うめえ…おいしい。そうじゃねえこと…そうではないのです。おりゃ…俺は。そげんこつ…そんな事を。いいど…よいです。たくね…無造作にまとめて。ババさん…祖母、年長の女性。うっぷるう…激しく振り回して。お医者さんごっこ…子共の自然態の遊び、健康を心配する備わった能力。行くきこす…行くからこそ。
- 41 P 天領…江戸期の幕府の直轄領地。

『こぼれ話しゃ茶店じ花が咲く』

昔んことじゃが今市にゃ宮崎ん 『トロク』かる府内に金が運ばるる中継場所じ 札差し掛屋ん役目もしよった。ところがじゃ府内ん受場んしが 突然の死去じここまじ来た金が 宙に浮いちしもったごたる。口水ん垂るるごたる話じゃがなえ。こげんことも時にゃあつたごたるで。

楼門ぬ作るにそっくりじゃ悪いち 苦情が出たもんじゃき棟梁と相談しち 日光だけじゃねえ京 浪花 奈良なんかん神社仏閣う見ち模写を書いち 出来たそうな。

『そりゃそうと肥後ん吉兵衛さんな こん頃あサカシイ  
ふうなえ』『もイットキすりゃ又京に 上るキちこん前に  
文がち一たんで』『よっぽずあん時ん事が 忘れられんの  
じゃな』『いいしじゃきなあ でんよかった』『ふんとな  
え人間の巡り会いは不思議なもんじゃ』

茶店ん親父ん話す 吉兵衛さんも道中じ腹痛おこしち  
五助さんが自分かたまじ 連れち帰っち介抱しちやつたき  
修行ん帰り 立ち寄っちご恩返し……あれが村ん狂言にも  
なっちそりゃ 評判がよかったなえ』『早えもんじもう  
5年にもなるが』

五助さんの人情物語りゃ種がつきんごたる。『そうそう  
ずっと新しい話じゃが 今市ん乾燥蔵じ朝倉文夫が ガラ  
ス越しい絵を書きよったちなえ』『かさん娘がじっと見ち  
よつたら そん絵を一枚くれたち……』『そげんこともあ  
ったなあ』『とにかく今市あ人ん心が 生かされちよるき  
ほのぼのした 話がいっぱい残っちよるなあ』

連れのうた旅んしも楽しい話 珍しい話をがいと聞いち  
こんまま 帰るのん惜しいごたる顔。ちり紙を一つ貰うと  
久住に向けち 歩き始めた今市ん肥後街道 五助けん馬子  
唄が周りん野山に響いち……。七瀬馬子唄から……

宇曾に行こうか荒木に出ようか 四辻峠ん思案顔 ハ  
七瀬のせせらぎ サラサラサラサラ ホイホイホイ。

アイと答えた神楽ん里の あれもとしごろ目が可愛い  
ハ 七瀬のせせらぎ 山ゆり香る ホイホイホイ。

久しぶりだと10年前の 客を乗せての馬子の旅 ハ  
七瀬のせせらぎ 紅葉がちらほら ホイホイホイ。

小無田はいよいよ野津原ん 中お通る肥後街道ん一番西ん外れ。ここかる隣合わせちやっぱ『小無田』ち 同じ呼びなん地名が連なっちよる。昔しゃ同じ地区じゃつたんじゃろうが 何かん都合じ二つに分けたんじゃろう。ここにゃ江戸期ん終わりに立てた 家がまだ健在じ残っち茶店。宿屋も兼ねちよるき ここまじ来たしが『もう泊まるこちしゅうか』ち 草鞋脱いだしも多い。

直入郡じゃつた面影もあっち てんびん棒担いだ人やら富山ん葉屋 道中ん旅人なんか気軽に泊まる。そりゅう又温こっ迎えちもくれた。表じゃ『うどん、ソバ』なんかが売られち『めんや』ん 名前が残っちよる。大きな茅葺きん屋根は冬温か 夏涼しい理想的な住居でんある。

朝地ん方を上無田ち呼び 今市でん南ん方を上《カサ》ち呼ぶのん 殿様が住まう所が竹田じゃき カサち呼ぶな肥後も熊本がカサ 府内がシモチ呼ぶのとな同じ理屈。心かそうさせるのんゆう解る。五助さんもあとチットじ久住に着くが ここかる右手に下ると長湯 左手は朝地、三重に延びる。

こん先うちって行って山ん中う下ると 不動岩んある井路つたいに入る。工藤三助が苦勞しち彫り開いた 水路んお陰じ米ががいと取れる 人ん世話になる人ん恩返しゃ 自分に出来る事ういつでん どこしでんしちこす人間の価値もあるもん。それがたった一度きりの人生を 有意義に過ごす哲学でんあるう。

連れん旅んしゃここかる竹田に行く 『世話になったな ぁ 楽しかったしいろいろ勉強も出来た』『そりゃよかったな ぁ 又会える日楽しみしちよるで』『ほんなな！』

『田んぼを作ちくるるき 荒れんじ済むし米も貰う事も出来る』 そげな優しい気持ちん地主が 病氣じ伏せてもう1月も過ぎたが 貧乏じ見舞いに持ちち行くもんが買えんじ困ちよつた。娘ん機転じ『イビラ餅』ち持参口の苦かった地主さんな 少し苦いイビラ餅が とてん美味しかったち喜んじくれた。優しい気持ちはこげえにも心を変えてくれたとん言える。

帰りに『モチゴメ、アズキ』を頂くのん 優しさに心が動かされた証。機転を聞かせた娘には正月に 晴れ着歳暮が贈られたち言う。ある地主さんな不作ん年に 小作が納めれんしに麦でんいいち 区切りだけはするよう論しち年越しさせたが 翌年にゃ2年分納めたもんじゃき 昨年の麦は『預かったもんじゃき』ち 返したち言う。

今市ん石だたみは長さが約700メートル 幅は約2メートルあるが所じゃ屋敷口まじ 敷いてある場所もある。石だたみ工事の際に応分の寄付をした その感謝の気持ちの現われんよう。きちんと整備されち今まで 残ったのん地元んしたちん犠牲も あったじゃろうし不自由もあつたじゃろうが ゆうみんなが我慢しち 大事にした宝物でんあるな 改めち見直されよる。

八幡様ん祭りん宵祭りにゃ下におくだり ここじ神楽やら相撲なんかあち 一夜を明かし次ん日の夕方 お帰りとなるがお供にゃ地区によち 受け持ちも決まちよる。石だたみ道が祭り客ん賑やかな中お お下りお帰りん様は石だたみに 祭り提灯の明かりが映えち 幻想的な様相も見せちくるる。

そりやぁカラコロン娘ボックリン 音たぁ又違つた雰囲気を醸し出しち 今市んよさも満喫出来る。

岡領の殿様が参勤交代の 上り下りにはこの『お陣屋』  
を利用する。お泊まりの時は木戸を閉めて 警護万端の夜  
を迎ゆるが普段の宿場町は 生活必需の店が軒を連ね 宿  
ん灯ゃ遅くまじ賑わいもあった。“明日は発つのか小窓を  
開けて 宇曾に小雨が降ればよい ハ七瀬のせせらぎサラ  
サラサラサラ ホイホイホイ”。

宿場町にゃいろいろん生活用品 かじ屋、研ぎ屋、油屋  
、酒屋なんかあっち 旅人にゃ思い出も出来るごたる 場  
所にもなったごたる。たまたま出会った人に “好きち言  
えない風呂焚く暮れの あれも19の身を焦がす ハ七瀬  
のせせらぎ サラサラサラサラ ホイホイホイ”。

古い町並みに比べち新しい宿場 そり一朽網古市に対し  
ち新しい場所じゃき今市ち呼ぶが 町筋が出来たんが15  
93年じゃき 江戸期に入るちっと前。その後じ江戸時代  
に入っち 石合は天領に後は岡領になった。参勤交代制度  
になると肥後ん加藤清正が 天草ん代わり豊後ん久住、野  
津原。鶴崎ち所望しち飛び地利用に ここ今市も通過道路  
としち 肥後街道に組み入れた。天満宮寄進や石だたみん  
敷設支援、なんかも時の外交儀礼としち お互いが持ちつ  
支えつつん交流をしたんじゃろう。

石だたみん西端に丸山八幡 これは明治になっち周辺の  
神社も合祀しち丸山八幡神社になった。1740年頃に楼  
門が長い年月をかけち 完成『日暮らしん門』としち近郊  
じゃ 珍しく素晴らしいもんじ地元ん 豪商小倉屋ん寄進  
じ出来た門。材料組木彫刻なんか目を見張るもん 日光ん  
陽明門に模写した作りは当時としては 画期的な建造物。

場所的にも府内鶴崎。直入庄内、久住竹田、三重大野な  
んかん分岐点『おばね街道』にふさわしい 宿場町ん宝物  
になった。

◎◎◎ 方言説明 ◎◎◎

- 4 2 P デーラ…平坦な所。シルルガ…知れるが。でえぶん…だいぶ、沢山。そうぐれか…そうですとも。ヨクワルル…休まれる。おぼね道…高い場所の道。
- 4 3 P ビクトン…少しも騒がず、驚かない。シャントシチヨル…しっかりしている。てーげん…たいがいの。ひもじい…空腹、物足りぬ。フトロク…沢山な。チギル…もぎ取る。じゃき…ですから。
- 4 4 P イロイタ…乾いた、干上がる。供出…戦時中に強制的に物を出させる。ヤンガチ…やがて。オシナギー惜しくて勿体ない。鉄下年金…田んぼにした農家に配水する税金を一定期間免除した取り決め。
- 4 5 P イビラ餅…雑草の球根を水に曝して作った餅。区切りだけは…節度だけは。お下り…飯宮に行く行事。

今市宿場町にゃ古い歴史は少ねえが 地域の人たちん英知と物を大事にする 優しくたくましい気持ちが残っちょる。石だたみにしてん犠牲も甘んじち 護ったきこす今も姿がそのまま残っちる。肥後ん殿様行列もここじ お言葉に甘えちソバン馳走になった。接待ん女奉仕者にゃ特別白足袋も 許しち心づくしんもてなしゅうした。

宿場料理にん『そば』をはじめ 『落とし汁…山芋利用』山菜を上手に使う ごぼうやコンニャク利用ん精進料理 豆を使う豆腐、甘汁、もち米利用んアンコロ、造り酒屋特製ん地酒、いなり寿司、ゆうまゝ出来るち味う堪能したごたる。

八幡様ん彫刻ん竜は夜な夜な抜け出すち言う それも近所ん田に現れちそん水う飲みよったとか。水ん少ねえ所だけに

百姓しは気が気じゃなかった。地区ん長老に相談しちある  
晩 みんなじ確かむるこちなった。待ちよる夜中に荒え  
物音そしち ゆう見るとあん堤に大けな固まり なんとア  
ン竜じやったもんじゃき いちベタマガッチしもった。し  
こたま水飲むとサート今市ん方に 消えちしもった。

『どこかる来たんじゃろうか』 意見あんゲこんゲン中  
じ 『八幡様え 竜ん彫り物んがあるが まさか! 『いんに  
ゃもしかすりゃ』 次ん日に八幡様え参ったら ちゃんと  
そん竜は納まっちよる。『よしほんなコイサ両方じ待つこ  
ちしゅう』 話が決まっちそん晩な二手じ 待つ事しばし  
。

堤にゃ案んじょう又水飲みやっち来た。いっぽう八幡様  
んしもツルットした間に 堀物ん竜が抜け出ちよつたき  
そん理屈がえーと謎解きも出来た。又みんなが知恵う絞り  
結局 彫った大工に工面しちもらうこちなった。大工も自  
分がほった細工いゃ分身のようなもん。嫌うたもんの農家  
に迷惑かくる そん結末あやっぱ責任もあるち しぶしぶ  
承知うするとそん竜に 自分かる鑿をふるうち そん流れ  
出る涙がシヤ竜ん尾を濡らしたら 彫物んの尾の先が割れ  
ち取れたち言う。皆ながん気持ちがこん彫り物んに 竜に  
も通じち自然と割れたんか そげなふうに見えたんか  
無事 水不足もなんとか食い止めち 実りん秋を迎えたそ  
うな。真心がこげなふうの様変わりする宿命じゃろう。

“実る稲穂に秋風そよぐ 心通じた世の情け ハ七瀬の  
せせらぎ サラサラサラサラ ホイホイホイ”。

“カゴで行こうかあの石だたみ 宿の障子に灯がとる  
ハ 七瀬のせせらぎ 紅葉がチラホラ ホイホイホイ”。  
五助さんがん馬子歌が 聞こえるごたる畦道じゃつた。

## 『地主んくれたみやげ餅』

今年も取り入れがえーと終わっち 朶干しがはじまった。地主ん家じゃ一足先に臼じチータ モチコメが美しい餅になっち こいさん客ん土産包みになっちよる。小作人な皆んな呼ばれち秋ん一夜は 優しい地主ん心くばりでんある。田んぼ作っちもらう百姓に お礼を言いたいち毎年ん行事。もう何年も続いちよるが それだけ作らせてもらう百姓しも どんくれー有難いか知れん。

『さあさ皆んな上がって何も無いけんど』 地主に迎えられる百姓にしちみりゃ 晴姿かん知れん。座敷に通され座布団にかしこまる姿 日ごろん苦勞がいっぺんにつーじ行くごたる。『今年しゃ水が少くのうじ 稲ん伸びが悪かったんじやない』 それに遠慮しながら答えるごつ 長老が『おかげ様じ水が少のうでん 田が上等じゃき変わらんユウ出来ました』『そりゃーよかった こいさは無礼講じゆっくりやっちよくれな 私しゃちょつと用事じ 出かくるきゆっくりしちおくれ』 心得たもんじ地主はそれだけ言うと 奥に引きこんじしもうた。

やんがちした頃にこんだ 奥さんが出て来て『米ん少なかったしは 言うてくださいよ 何とか考えちょきます。そげえ言いよりましたき。ゆっくりしてかえりにゃ 家じ待つちよるしたちに 包みを持って帰ってくださいな。ちっとじゃが今年んモチコメじついた餅です』

奥さんもこれだけ言うとサット消える。後は小作人同志がゆっくりよばるる 秋ん一時じゃがやっぱ皆んな 帰りを待つ『ヤウチ』そり何ちゅうてん 土産を待つちよる子供たちか顔が くるくる回っち『早う帰りよ』ち 囁くごたる。

頃あいを見ち女中がご馳走ん残りを 包んじくれでえたき『ほんなそろそろお暇するかな』 　その声を待ちよつたごつ皆んな立つと 　暇乞いもそこそこに家路に急いだ。『いい地主ん田を作っちよかったのや』『そうとんコイサ又ひと頑張りするかのう』『若えんじゃき張りこめや』

笑い声がいつまでん聞こえち 　喜びながら帰っち行く後を見送り 　『旦那様みんな喜んで帰りました』『帰ったかえよかったのう 　来年も又いい作になるごつな』 　地主の家でんこれかる皆んなが 　楽しい夕餉になるんじやろう。熱心に作ってくれる人たちが 　いるからこす田んぼも荒れんじ 　みずみずしい稲が実る。

『こげな地主もあるきこす 　厳しい年でん我慢しち作ることじ 　皆んなん幸せも保たれちよる』『ふんとなゝ 　あげな人にゃきっといい報いもあるじやろうな』『それで前に話した 　イビラ餅にしてん 　出来の悪い年に小作米を先に延ばしちやる 　そげな気くぼりがあるき信頼にもなり 　作る意欲にん上手に作る工夫にも 　なるんじやあるめ一か』『なるほどな』『なるはずチギリ秋茄子び 　ち言いてんじやろう』 　二人が笑おうかち思いよったら 　馬が先嘶いた。

“よけた夕立ゴザ引き寄せち 　子供んママゴト一休み “  
ハ七瀬のせせらぎ 　ボンジが咲いたか 　ホイホイホイ “

“ 湯立てしてからお前と二人 　起きた息子を寝せつけ  
る 　ハ七瀬のせせらぎ 　月もほんのり 　ホイホイホイ “

“暮れた夜道に里の灯見える 　あれは丹生山練迫 　ハ  
七瀬のせせらぎ 　湯煙のぼる 　ホイホイホイ “。

今市まじ来ち『押し寿司』も けっくしゃ旨かったが  
やっぱクドん縁 汁が飛びはねてん『だんご汁』おいしい  
な。『いよいよ今市かる小無田を抜くりゃ 久住まじ  
でーら道しゃき眠っちょつてん着く』『じゃなゝそりい  
してん 高岩神社んトチの木ん話しゃ どげなったん』

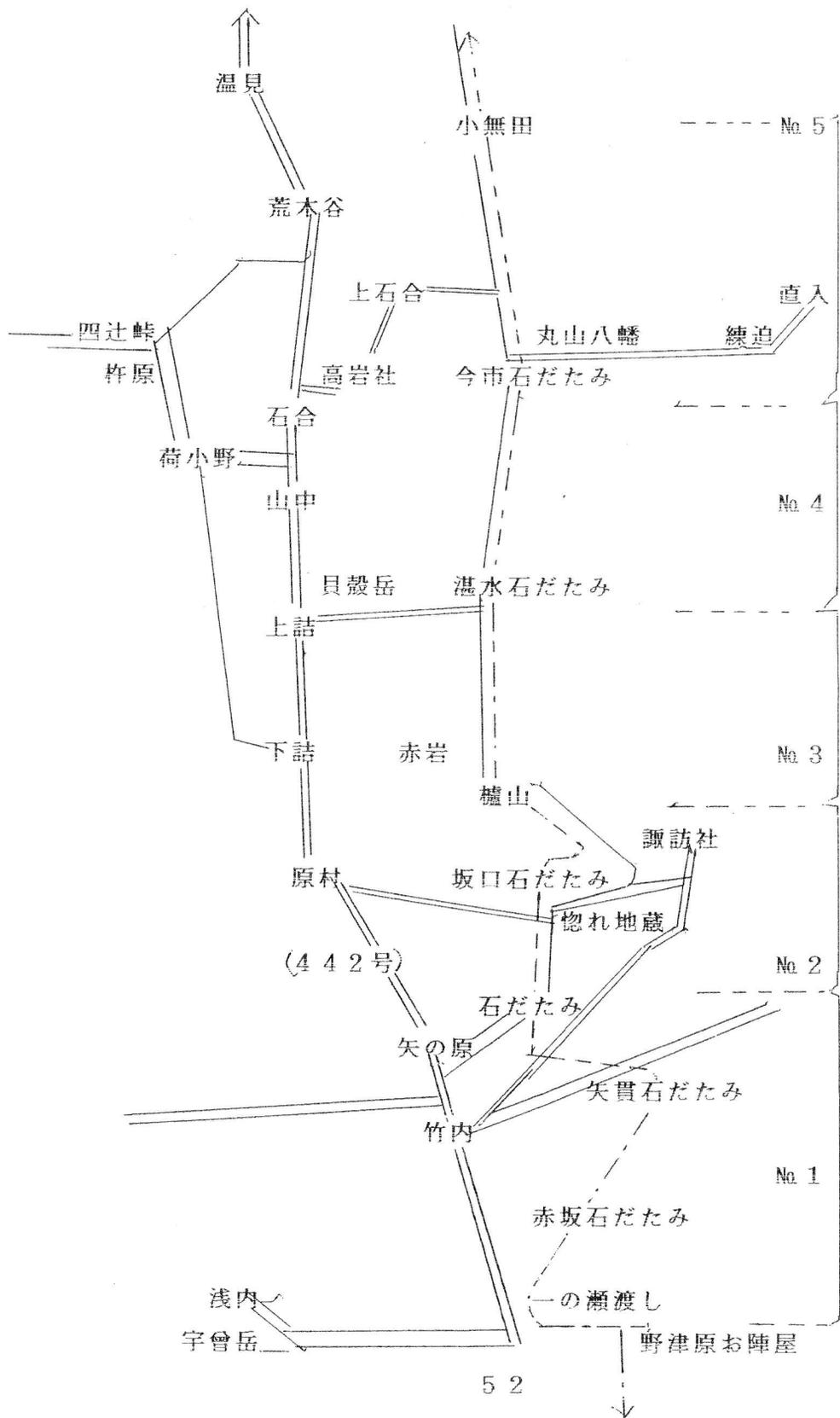
紀州熊野かる実を持ち帰ったち言う トチん木は実が  
曝すと飢饉ん時ん非常食 そげん願いもあっちか今は5  
本も 岩を隠すごつ繁茂しちよる。貞観5年ち言うき  
863年に植えたこちなる。

後藤家住宅は18世紀中頃ん建設 昔ん庄屋屋敷ん面  
影が残る当時ん 形式に正しい間取りが生かされちよる  
。昭和50年《1975》に 重要文化財に指定されて  
持ち主が 管理して保存されちよる。

古い伝統を持つ『荷小野の獅子舞い』 杵原『白熊練  
り』、白家ん『神楽』なんかも 今市ん代表する文化財  
じ 大野文化やら直入文化なんかが 交差しち有形無形  
ん人ん心に染みる 大事な人間生活の糧にもなっちよる  
。

1810年にゃ伊能忠敬が全国測量じ 1864年に  
ゃ勝海舟が坂本竜馬と 長崎に急きょ政策じ通過する。  
九州有数ん高原ぬ越ゆる 横断街道が山越え谷渡りしち  
通る そんな昔日ん思いが走馬灯んごつ 浮かび上がるご  
たる肥後街道。きらびやかん行列が山肌に ゆう調和し  
ち目を奪われたんじゃあるめーか。

“アオいさめよ宿場はそこじゃ あれが街道ん石だ  
たみ ハ 七瀬んせせらぎ サラサラサラサラ ホ  
イホイホイ……”。





あき

こどもん世界

『シイタケ山』に行く道。春ち言うにまだ 手先も冷とっじ半纏ん中へ手を入ると 末ちゃんな『お昼になるで』ち 言いに行きよった。と そんな時じゃった。羽ん美しい小鳥が サッと飛んだち思うたら ちっと前に舞いおれた。『あら かわいい』歩むぬ止めち じっと見つむると 小鳥もジット見ちよる。

静かに 末ちゃんが歩くと こんだサッと飛びあがっち またちっと先に 舞いおりた。『あんた 元気がいいな』末ちゃんは 一人言いいながら こんだ ちっとはよう 歩いち働まじ行きかけたら パッと舞い上がる。

何回かくりかえしよると なんか まるで夢ん世界に おるそげな気持ちになっち とてん、嬉しくなりました。じゃもんじアブネ 山ん入口う 過ぎかけちしもった。『あんた元気しちよりよえ』 声をかけち 飛びたった 小鳥と別れました。山にも陽がさしこんで来ました。

『もう お昼になるんで』『そうか ほんなイヌルカノウ』元気のいい父の声。『寒いこたねーな』 やっぱ 母親は優しい。もいだシイタケを かごに入れち 車に積むと 『こき乗れ』『あーい』 末ちゃんも チョコント乗りこみ 帰り道じ小鳥ん話をしました。『りゃー仲良しが出来たんか よかったのう』

父さんが喜ぶ顔に 母さんも嬉しそう。 元気に育ちよる子供が 小さな小鳥にも いつも優しくする そんな気持ちが親はどんくれ 嬉しい事か。『また 合うといいな』『うんあしたまた 来るかな』『来るかん知れんで』 話が弾んじよる。そげなナカメ もう家に帰りち一た。

次ん日も山に入ると チュチュ小鳥ん鳴き声。『あらあの小鳥』末ちゃんな すぐ解った。嬉しかった また合えた。末ちゃんは冷たい山の中の道でも もう今日は元気一杯です。チュ チュ小鳥が 何か話しかけちよるごたる。『どしたんな』『……』小鳥はきっと 何か言いたいんじゃないやろう。

昨日のごつ ちっと先に舞い降りちゃ 待つちよる。末ちゃんが働まじ行くと サッと飛び立っち ちっと先じ又 待つ楽しみか。『そっじや 待ちよえ これ食べる』 オトシから取り出したな トイモン蒸すたの 半分つみ割ると 草の上においち ちっと下がった。いっとき見よったが 飛んで来た。『あ 食べた』

小鳥も美味しいのか 口でつついている。『よかった』 じっと見てる末ちゃんも うれしいのかそこに じっとシヤガミくーだ。一生懸命食べてるんを見ると もう何日も前からん 友達んごたる。『おいしいー』『チュ チュ』 食べながら それがいかにも美味しいのか 声と身振りで ゆう解る末ちゃん。

人間とは違う暮らしかたん 小鳥。人間はいつでも好きなものをたべられる。でも小鳥は 自分で捜して食べないと 可哀相にも思う末ちゃん。しばらく見ていたが おなかが一杯になったのか チュチュと鳴くと 飛び去ってゆきました。『又合いましょう』末ちゃんはいつまでも 小鳥の飛んで行った 方を見ていました。

『こげな事があったんで』『そりゃまゝ よかったなあ』 話を聞いた ばあちゃんもとても 喜んでくれました。『あしたも来るといいな』『うん きっと来ると思う』 でもそれから5日も来ないのでした。心配でたまらない末ちゃん。『大丈夫かな』ととても 心配になりました。

そして10日ほどした朝じゃつた。ガラス窓の外に小鳥が チュチュ鳴いています。『あら あんた元気じゃつた』 まぎれもないあん小鳥じゃつた。

春ちゃんは今日は 近所じ『ヒトギマキ』が あるき勉強を  
早う済ませち 行くぬ楽しみにしちよつた。ところが今日ん  
宿題はちっと難しい。『うーんコリャ解らんのう！ 鉛筆口に  
くわえたり 頭を撫でまわしたり 急ぐ時ち々なかなか 答え  
が浮かんじこんき 大けなため息が『あーあ』。

ちょうどそんな時 隣ん高校ん兄ちゃんが 窓かる そんな苦勞  
しよるため息う 聞いちよつた。『どしたんか春君 宿題が  
難しいんか！『うーん！ 生返事しちウラメシそうに 助けを  
頼むような目じ 見返した。『どう 見せちみよ！ 窓越しん  
勉強習い 恥ずかしいんか ペコンと頭さげた。

『ははー こりゃあ難しいのう！』『じゃろう』 味方が出来  
ち ホットした春ちゃん。学校じ先生ん言うぬ 聞いちよらん  
じゃつたんじゃ ねえか！『……』 黙ったところを見ると  
大当たりんごたる。『こん地図ん上は どっちん方向かのう！  
『エート東！』『やーそうか！』『じゃねえ北！』『じゃろうー！』

『解った そうか横にしてん 地図は上が北じゃったな！  
兄ちゃんも えーと解った春君の 早合点に教えがいがあり  
ほっと安心しちよつた。『そんな調子で 解いたらいいんど！  
『おおきに！ 急いで後の問題を 次々に解いて 終わると  
ヒトギマキに 走って行った。

じゃけんど 宿題が手間どったもんじゃき ちっと遅れち  
しもうた。もうヒトギマキは 終わちよつたき がっかりし  
たが これも自分の不注意ち 諦めたけんど 何か惜しい気持  
ちになった。と そんな時じゃつた。ここの家の ばあちゃんが  
『春ちゃん 遅かったなあ はい こっちおいで ちゃんと  
あんたん分は ここに取ちやるで！』

『うちん嫁さんがなァ 春ちゃんはとても利口者じ 家ん加勢も ゆうしよる感心な子供ち 来ちよらんごたるき 残しちよくち ほらお盆に乗せちやるき』 『ふんとオオキニありがとう』 そんな話を聞くと春ちゃん とても嬉しかった。遅れて行ったのじゃき 貫いださんでん 当たり前じゃに 感心な子供ち 別に残してくれたち そげな話を聞くと 子供心にも なにか嬉しゅう なっち 跳びはねてえごたる 春ちゃん。

そん声に嫁さんも仕事途中か 手を拭きながら来て 『はい これはヒトギ餅じゃが あんたの日頃ん ご褒美よ』 そう言う と ニコニコしながら お盆のヒトギ餅を 新聞紙に包んでくれました。涙が少し出かかったのが 春ちゃんは解りました。包む新聞紙の中には ヒトギ餅やら こよりに結んだ5円玉も。

『こげ一貫ってもいいん』 『いいで ご褒美もな』 笑顔じ 差し出した『ヒトギ餅』家の普請は 怖い火事から逃れる為の 行事とか じゃき『ヒトギ』ち 大きな声で言ってまく。それは 『火が遠くえ 火災の難から守ってほしい』 そげな願いも込められちよる ち 言う。《皆んなが賑わうのも祝いますの意味》

春ちゃんは丁寧に お辞儀すると『おおきに』と 嬉しい気分を 押さえるんが必死ん 思いじ家に帰りました。『今日はとてん カキニャ合うめえ』 家の人たちは そげ一思いよったら 新聞紙に包んだ 大きなみやげ。『そげ一貫ったんな よかったなァ』 『あっこん はばさんやら 若い嫁さんやらが こげえも残しちよつたんで』 『まあまあ 日頃かる ようしちよきゃこすこげ一 子供にまじ しちくれたんか』

大けな家ち言いよったき きっと栄えちバンバンザイ じゃのう。子供心にも こんヒトギ餅ん事は いつまでん忘れられん 春ちゃんじゃろう。棟上後の新しい木組みに 五色の旗が喜びを 込めち 泳ぎよるんが美しい。

由布山かる話があっち 『宇曾山を嫁に欲しい』と 仲立ちを頼まれたそうなの。そこじ 障子岳なんかん皆んなが 集まっち 相談した結果 宇曾山の気持ちを聞くこちになった。長老ん障子岳が 『こうこう言う話があったが どげえな』ち 隠さんじ話しを伝えちみた。

嫁に行く年頃でんあり 嬉しいのは嬉しいが やっぱ故郷を離れるな気が進まんじゃった。『うん』 返事が重てえもんじゃき 『無理 気がすすまんのなら いいんで』 そげ一言うとはったんか 笑顔が出たもんじゃき 『やっぱ行きとぅなかつたんじゃろう』 ち 長老も思うた。

『心配せんでんいいき 相手にゃ旨い具合に 断わるき』な。

次の日に早速 由布山の家に行き 『どうでん気が 進まんごたるき よっぽず 悪いがこん話はなかつた事に』 と 丁寧な断わった。『そりゃまあ 惜しかったけど 気が進まんんなら 仕方あるまいなえ』 それを襖ん影じ 聞いちょつた鶴見山は 泣き出してしもった。

又仲立ち役した 由布山も 折角ん取り持ちが 出来なかつたもんじゃき 『済まんこつしちしもうた』ち この人も泣き出し そん涙が土の中に しみこんで やんがちすると 吹き上げた水はなんと お湯になっちゃつた。それもいつまでん ふき出しち今も毎日 ふき出ちよる。じゃきこの辺は 温泉が出るごつなつたそうなの。

宇曾山な 申しわけないち 縁のなかつたのにと。これも巡り合わせなら しかたんねえ事。今でもここらは温泉が出ない。もしあん時 話がまとまっておつたら こっちにも温泉が……。

そげ一は話は 旨いことにゃならんもん。宇曾山も後じ考え  
ち 見ると申しわけない 返事したのに恥じた。悔やんでいる  
宇曾山に 天狗がそっと耳打ちしたんと。

『皆んなこの世には 役割があるもん。お前はここで子供ん  
成長を 守る事をすれば それも意味がある』 こう言われて  
『そうだ私もそれを これからしっかり守って 頑張ろう！』  
と 土地の子供たちの 病気を助け 成長の手助けをする。特  
に宇曾山には ツツジが沢山あって その香りが子供の発育に  
いいとか。

温泉は出ないが自然に育つ 木草によって人間の 成長にな  
る役目を果たせば 断わった鶴見山も きっと喜んでくれる。  
と それからは 努力するようになったんと。

鶴見山 由布山には温泉で 人の心を癒し和ませる。宇曾山  
は自然の霊気によって 人の健康の手伝いをする。天狗が教え  
た 自然界の流れの中で それぞれが役立つ事は 大きな意義  
がある事も 解ったようです。川一つ挟んで温泉が出たり 山  
の霊気が 温泉とは違っても 成長に役立つならば 感謝して  
お互いに それを利用すれば 健康で心も豊かになるのでは。

宇曾山の『子供の虫封じ』は 遠い昔から霊験がある。それ  
を 巡り会った人たちが 生かした使い方に 結びつけたのも  
素晴らしい 事んごたるなえ。

宇曾山は標高約600メートル 人間の生存  
に最適と言う。ここに自制するツツジの芳香  
生活環境に適合して流れる 気流と共に精神的  
にも 効果があるとか。修行場として古くから  
利用され 天狗の白衣が閃く姿は ふさわしい  
場所のようです。



M

## 『裕ちゃんの誕生日』

小鳥の鳴き声がすぐ側で聞こえていました。日曜日だから朝寝坊した裕ちゃんは目をしばたたせながらカーテンをそっと開けてみました。外の木の枝に止まっていたのか小鳥が慌てて飛びたちました。目をこすりながらよく見ると一羽だけ止まっているのです。

さっきあんなに鳴いていた小鳥の仲間かな、と思っていましたがどうやらこの小鳥はそんな仲間ではないようです。『どうしたのだろう』裕ちゃんは窓を開けて今度は小鳥に『おはよう』と声をかけてみました。でもその小鳥はじっとこちらは見ているのですが鳴き声はないのです。

『あなた どうしたの』不思議に思って声をかけてみました。すると裕ちゃんの声がわかったのか小さい声で『チュ』と一声鳴いたのですが元気がありません。裕ちゃんは今日は『お誕生日』なのです。だからルンルン気分でしたがあまりにも静かにじっとしている小鳥を見るとなでか可愛いそうになりました。

ほかの小鳥がまたたくさんその木に飛んできました。又賑やかに鳴きはじめました。それでもその小鳥はじっとしていて鳴かないようです。『もしかしたら病気では』優しい裕ちゃんは心配になりました。私は誕生日でそれに家の人たちが皆んなでお祝してくれるのに。

そんな事を考えながら見ているとさっき飛んできた小鳥たちが飛び立ちました。その小鳥たちが誘ったのかもしかして迎えに来たのかこんどは一緒に飛んで行きました。『あーよかった』裕ちゃんはほっと安心したようにその話を皆んなに朝ごはんの時にしました。

『もしかしたら 怪我でもしているのでは』 お父さんが心配して こう答えました。『病気では』 お母さんも心配でこう話しました。おじいちゃんも おばあちゃんも 皆んなが心配して折角の 朝ごはんがなでか 明るさがなくなりました。

と お父さんが『でも一緒に飛んで行ったのなら たぶん大丈夫じゃない』『そうね』 お母さんも そう信じたいようでした。裕ちゃんは『私は幸せ者よねえ 今日も元気に目がさめたし』『ちょっと朝寝坊したけどね』 お母さんが笑いながら相づちを撃ちました。『そうよ元気であるのが一番しあわせよ』 おばあちゃんが大きな耳をあたりながら言いました。

『裕ちゃんが心配してくれたから きっと元気になると思うよ』 おじいちゃんもこう言いながら 窓の外を眺めました。『あら あの小鳥じゃないの』 その声に裕ちゃんは箸を握ったまま外をみると 窓の側に一羽の小鳥がとまっています。『あんた元気になったの』 『チュー』 今度は大きな声で答えてくれました。

『ほら裕ちゃんの気持ちがきっと 通じたのよ』 おばあちゃんから褒められました。『チューチュー』 鳴いたと思うと今度は元気に飛んで行きました。『あら飛んで行ったよ裕ちゃん』 お母さんも嬉しくなったようでした。子供が元気なら親はどれほど嬉しいか 家族がみんな小鳥の気持ちになった 朝でした。『裕ちゃんのお誕生日にお祝に来てくれたのかな』『でも朝寝坊の裕ちゃんに似て 朝寝坊だったから 鳴かなかったのかもね』 お母さんのその言葉に耳を傾けた 裕ちゃんは『これから朝寝坊しないようにします』

ニツコリ笑った裕ちゃんに 皆んなが大きな拍手を贈りました。きっと小鳥も元気で飛んでいるのでしょう。

もう昼近くになった坂道を とぼとぼと年取った僧が 杖を頼りに上って来る。はいたワラジは半分破れて 飛び出した足には怪我をしたのか 血が滲んで見るも哀れな格好。農家の門先に立つと心のこもる お経を唱えはじめた。一足先に帰った娘が気がついたのか 奥から出てくると 『折角巡礼しているのに 貧しくて何もあげられない』と 少し困ったようでした。

山合いの水の少ない農家には 満身に食べるほどの物も出来ない そんな生活が続いているが 苦勞していても心までは 貧しくはならず皆で助け合って生きている。お経は続いていたが 娘は困りはてたが このままお帰りしてもらうのも気の毒。昼ごはんは野良から帰る家の人たちには 少し我慢してもらってその分を……。

娘はそう思うと朝の残りごはんを おにぎりにして小皿に乗せると 『恥ずかしいのですが これくらいしか お接待ができません どうか お許しを』と 差し出した。年とった僧は丁寧な断わりと 『勿体ない その気持ちで充分です 働いて昼に帰る人たちの すかしたおなかを どうか満たしてあげてください。』

僧と娘がやりとりしている時に 家族も野良から帰ってきた。そのありさまを見て娘が お接待している事がすぐわかった。父親はすぐさま 『どうか気持ちだけで申しわけありませんが 食べてください』 そこまで言ってくれた家族の気持ちに 感謝した僧は 『折角の お接待頂戴いたします』 空腹がもうだいぶ続いているのだろう 涙が頬をつたい土ほこりも一緒に流してゆきました。

母親が運んだお茶をおし頂くように 口に運ぶと貧乏暮らしのこの人たちの 心の何と優しい事かと 苦勞する姿に何かお返しできたらと 思案を巡らしているようでした。『皆さんの食事にまでせりこんで 申しわけのない事をしました。今日は何のお返しも出来ませんが 今何が一番ほしいでしょうかお聞かせ願いたい。 1

言われた農家の人たちも自然のあり方はどんな偉い人の考えでも通じないだろう…と返事に困りました。でも折角ここまで言われてお応えしないのも失礼と思いついて 父親は返事しました。

『無理は解っていますが もし もしですよ 叶うなら水が欲しいんです。水があれば 米も出来るだろうし 野菜だってもっと沢山出来ます。それに山の木も果物も いっぱい実をつけてくれるでしょう』。僧は黙って聞いていました。よく解る理由でした。

父親は少しよくばったのではと恥ずかしくなりました。『そうですか よく解りました 本当に水が不自由なようで気の毒に思っていました』 僧はしばらくあたりを見回していましたが しばらくすると 頭を深深とさげて 『今すぐには無理かも知れませんが きっと優しいあなたたちの願い 叶うでしょう。これからは病氣しないようにして 優しい今の気持ち大事にして いつまでもお元気に過ごしてください』 僧は又頭を深くさげると すり切れた草履をひきずりながら 坂道をのぼって行きました。

いつまでも見送った家族のなんと 優しく心の豊かな人たちでしょう。でも今日の昼ごはんは一人分足りないのです。父親は『俺はいいど トイモでん食うから』 と母親は『私は漬物だけでいいから』 娘も『私が接待したのだから お茶だけでいい』。家族が貧しければ貧しなりに助け合う そこに人間の生き方の道があるのではないのでしょうか。物に恵まれすぎると感謝の気持ちが薄らぐ。それでは人間としての価値観も失われます。

それから2、3日した朝でした。早起きした父親が畑の方から音が聞こえる。慌てて行くと…なんと水が湧き出ているのです。家族に知らせ村の人たちにも知らせました。きっとあの僧がお礼にと水を恵んでくれたのかも。人に尽くした親切が夢にまで見た水になって 畑を潤してくれる あの優しい情けが帰ってきたのだろうと。

今も田んぼを潤してくれる水 昔の人たちの情愛が残されたの  
2 でしょう。心まで貧しくなっては生きて行けないかもね。

## 『親を知らない結婚式』

お母さんがそっと涙をふいています。結婚式を迎えて嬉しい春子ですが 母の泣いている姿に 『お母さん……』 そっと囁くと式場に来てくれた 多くの人に申しわけないと 気を使います。春子が生まれた時は父親は戦争に 一枚の招集礼状で出て行ったのです。

その頃は成人で軍隊に入り 戦争が起こると男はみんな 戦争に行き国のために戦ったのです。国の為になるのはよいのですが その為敵の弾に当たって戦死する 怪我をする…そんな人たちも少なくなくて 小さい子供を抱えた お母さん心配で しかたなかったのです。でもそれを口に出すことは絶対に出来ませんでした。

そして戦争が終わるほんの少し前に戦死 悲しい知らせがあったのは春子が5歳。まだ悲しいと言う思いはないままの 年頃でもあったのです。お母さんとだけの暮らしが 当たり前であってお父さんがいるのは なでか不思議に思っていたのです。でも年を取るうちにだんだん お父さんのいない淋しさも解るようになりました。

『こんな嬉しい日に お父さんがいたなら 甘えて…』 春子の夢が広がっては シャボンダマのように消えました。『お母さんは泣かなくても父親がきつと 娘を嫁に出す淋しさに耐えられないと目を しばたたせて泣いた事でしょう』 回りの人たちもそんな事が伝わるように 優しく見守っていました。

会場に『花嫁さんの お色なおしです』 父親が迎える場面があるのですが 今日気をきかせて おじさんが努めてくれました。だから家庭のくわしい事を知っている人は 同情とお祝との眼差しで 花嫁が輝くような姿の動きに 拍手を贈って迎えた人の心。春子にはそれが痛いほど解って うつむいた目頭が又熱くなります。『こんなに皆さんが祝ってくれている だから絶対幸せになります』 心にしっかり誓う春子でした。

『お母さんありがとう 私し幸せになります』『…………』お母さんは黙ってでも笑顔で頷きました。苦勞かけたけど 幸せになって仲よく頑張るってほしい。母親は今までの長い苦勞から やっと肩の荷がおろせる思いでした。父親がいないままでも素直に 育てくれた春子の嬉しそうな顔に ぼとり涙が頬を伝わりました。

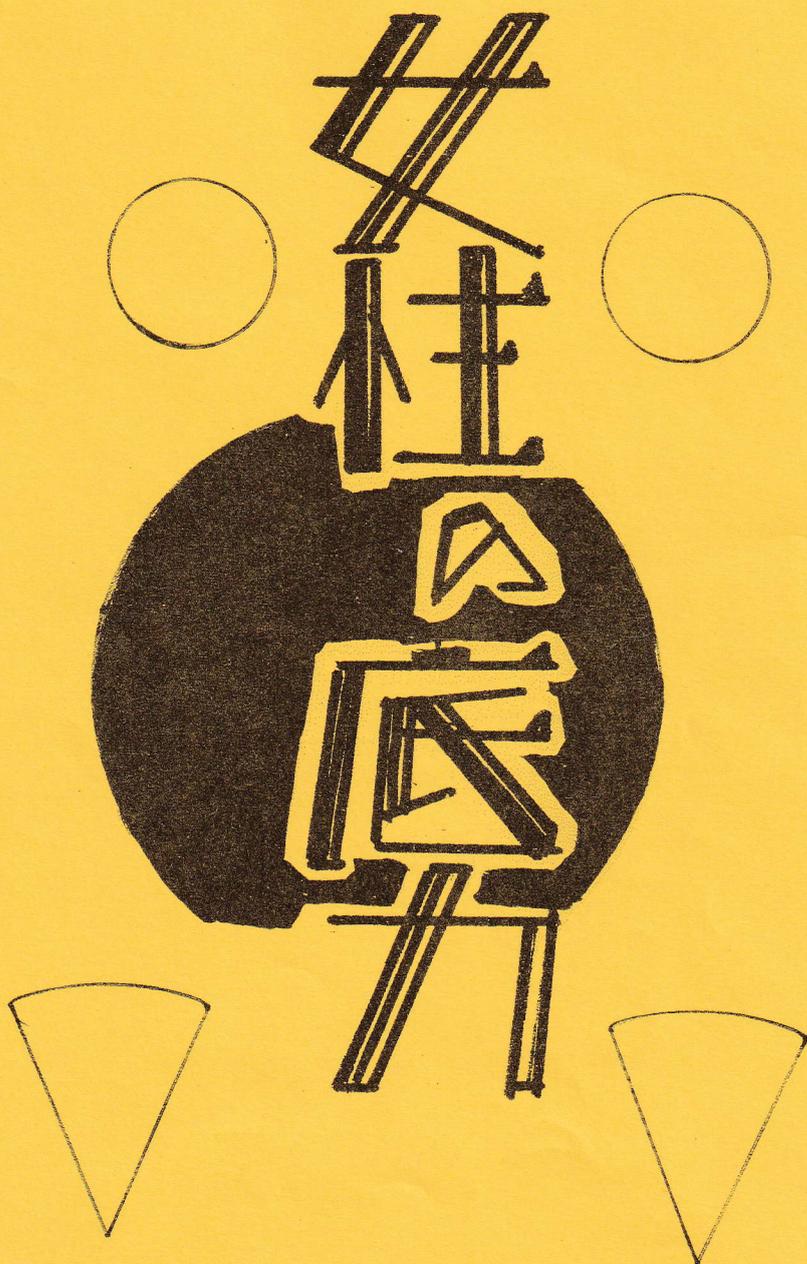
無事に結婚式を迎えたとは言え 戦争が無くて平和であったなら春子も ほかの人たちのように父親母親に 甘えながら大きくなったであろうに。戦争とはこんなに多くの人たちを 巻き添えにして幸せの邪魔をする。戦死したり怪我をして 家族の生活をかき回す事もあって 平和がいかに大切な事か。

育ち盛りに苦勞したから どんな苦勞にも耐えられる気持ちも体力も出来た。人の気持ちも見かけだけでない 人間の本当の心の中も解ったような気もする春子。そして多くの人たちに世話になった 感謝の気持ちと人の為に来る事は する事と言う勉強も身についた。父親の役割や母親の役割もわかったと思う。

1月程したある日 旦那さんとお母さんのいる里に帰って来た。『お母さん私し炊事も洗たくも掃除も…………』『みんな出来ると言うのでしょうか』『そうそう それに…………』『もういいよ 家庭をもったら二人でちゃんとして 幸せになるのよ』『…………』春子は母にはこんな言い訳はいけなかったと ふと恥じました。

自慢したい気持ちは間違っていたのです。それが当たり前の事で母親は 私の生まれる前から続けていたのでした。生活の家庭の先生だったのです。春子は苦勞した母親に少しでも長生きしてほしい そして里に帰った時は母の分まで全部 してあげようと心に決めました。『お母さん私が…』『いいから家に帰った時は 私がするからゆっくりお休み』母に言われるとつい甘えがでそう…………二人は顔見合わせると 噴き出して笑ってしまいました。見ていた旦那が不思議そうな顔 平和はなんといい事か。

B



## 『千人針に願い込めて』

戦争たゝ惨めなもんじゃが 祖国を守る為にか防ぐしかねえ。子供が夫が親やら兄やらが 戦地に出ち行く難関の時。親を女房を子供たちを 残しち国の為には潔ぎいい気持ち 当人ぢねえと解らん心境でんある。留守う守る人ん今出来るんは 無事に帰ることのみでんある。

晒木綿に赤糸じ1人ひと針 1000人が心込めち縫うんを 『千人針』ち言う。縫い取りうシチモロウタぬう身につけち戦場にでると 弾丸にあたらなち信じち 昔ん日清戦争、日露戦争、頃かるはじまった。そしち第二次戦争でん見られよった。

町ん辻 皆んな集まる場所 あちこちに回っち お願いする姿はまさに真剣そのもん。戦場ん身代わりとしち チットデン早う縫い上げち 送る事が心も結びつけた。心んより所でんあったじゃろう。小さい子供なんかん姿にゃムゲノウジ『2つ縫おうか』ち 耳打ちするひと暮も。

赤は元来 呪力があるち言われ 又おおけな人数ん心う合わせち 祈願する風習は平安朝ん 多数思想にも見らるるもんがあった。そげな習わしに一途ん 願いを託すのん人ん心ん情愛。ましてや肉親じあっちみると チットグレン寒さ暑さなんか ヘイチャラデンあった。

『オカチャン うつとがんな もう出来たで！』 町ん辻 じ頼んだ娘が帰っち来た。『もうえ 皆んな縫うちくれたんじゃなあ！』『皆んなも声かけち くれたき嬉しかったわな！』『みなあ日頃ゆうしちよきゃ…………』 母親はもう涙声つまらせちよる。

出征兵士だけじゃねえ 軍馬に徴用されち行くのもある。男手がのうなった百姓ん 頼りしちよる馬でん ある日突然徴用令書がくる。働き盛りん娘たちにも 『青紙招集令状』がくる。戦争はこげなふうにしち 戦地に出るしだけじゃのうじ 軍需工場に呼び出さるる そげな人たちまじも 戦争ん参加でんあった。

『お前かたん娘は工場に行くちのう！』『そげんこちなったしかたねえのう』 心ん中じゃ悔しいじゃろうが 戦争は皆んなじ向かわにゃ 始末んつかん争いでんある。『ばあさんが 千人針う頼んじ縫うちもろうたき 待たせちくりー』  
『りゃーそりゃ濟まんこっじゃのう』 『そんぶん俺たちん代わり 頑張っちもらいて一き！』

戦地に行く馬にもかけてえき 家んしたちが皆んなカテ頼み行くのがもう あっちこっちじ出会う。ヨソンシタチも『いいで加勢するで』 集まっちゃ縫い合うもんじゃき時のめえに出来あがる。留守家族んしも嬉しさに 自分も側について行くごたる思いに 心もふっと和んでくる。

戦地に送る『慰問袋』にも 『入れち送ろうえ』ち意見がまとまると もう勉強はあとまわし 街角にでると大きな声じ呼びかけ。道行くシタ**もも**避くるなんか とてん出来もせんが『無事を祈らにゃ』ち 手早く赤い玉が次々と出来あがる。人ん心がよりあう時そこにゃ 目に見えん大きな魔除けが 出来上がるもんでんあった。



しっかり腹にしめた千人針は 時として伏せた横を弾丸がすり抜け 命拾いした例もよく聞いたもの。心こめて縫う人の願いは このようにして一命を守ってくれていた。まさに天祐神助なり。

## 『母に加勢の力戦奮闘』

戦争たぁムゴタラシイ えーと終戦ちゅうてん 本当は敗戦じこすある。でんいつまでん泣いちょれん。家庭復興が急かれち戦死した 父親ん分まじ働く母親を 助けにゃ『おかちゃんがいきつく』 年寄りもわが子を戦争じ失うなんか 戦争が憎らしゅうじ 孫まじが加勢するんぬ 見るにつけてん いじらしゅうじもう。

『今日は馬屋ん肥だしゅ』 母親ん話しゅう聞くと半身裸になった。『お前も加勢しちくるる』 涙声になりそうなぬ堪えち言う。『昼まじ出したらすむこと』『じゃな』『じいさんも行くど』『じいさんいいわな 今日花筒う切っちきて』『そうか そげしゅうか』

盆が近えき肥だしすりゃ 盆のシマイも半分すんだようなもん。お墓に立つる花筒も ケックシャ ガイトイル。ネジ鉢巻きした じいさんな山に行き 母親と半裸ん娘ん二人が 馬屋かるガンマクじ引きだしよる。ばばさんなそげな働くしたちゅ横目に コンメー男ん子ん守りと 茶沸かしなんか ウマイゴツ仕事たぁあるもん。

ユゲも立つ馬屋ん肥うツボ先 引きでーちゃコズミあぐる。小学校生徒にしちゃ体格こすいいが 肥出しゃ重労働でんある。母親か苦勞するぬ見ちゃ 母性本能がそげーさするんか 裸になってんオカシュネエ 年頃でんあるに 気丈な気持ちゃ父親ん 逞しい血が通ちよるんじやろう。

『ちょいと一服せんな』『もうえ』 そう言うたもんの やっぱ子供 もうダリが顔に出ちよる。ほっと母親ん顔を見ると 感受性ん強い娘にゃそれが 痛いはず解る。

『昨日んトイモ食ぶるな』 ばばさんが孫可愛いさに言う。  
『オカチャンどげー』 母親に声をかける優しい 心くばりに汗が頬を伝わっちそれが隠した涙まじ ツレノウタ。『うんちっと早えが昼まで小屋に すんな』『……』 二人は顔見合わせち 大笑いしたもんじゃき ばばさんも嬉しかったんか 皆んなが思い合う気持ち 貧しくてん苦勞してん どれだけ楽しいか。

山に行った じいさんも竹を引こじっち 帰っち来た。笹が頭に巻いたハチマキに 飾りんごつ付いちよる。『じいさん笹ん勲章がちーちるで』『そうか おおきに こりゃお前どうがハリコミよるき お天と様がクレタンカン知れんど』 やっぱ年寄りゃ伊達にゃ 生きちょらん。言う事ゃドッカ違うもんじゃ。

『ひずかったな 茶を飲みよるんで』『そうな 節子もヒズネエカ』『しよわねーで オトッ』 ち言いかけたが言葉濁しち『じいさん山の中 暑かったじゃろう 蚊はオレンジツツ』『それがのう 蚊がもうテンショムショ来ち』『じゃろう 刺されたんじゃねえ ホロセが見よ』

孫娘がいたわりの話かけに 親父が戦死せにゃのう こげなコンメー娘が健気にち 目をしばたたせた。『じいさん茶が入ったで トイモ食ぶる』 ばばさんがうまいこと 中に入った繋ぎ言葉じ じいさんの涙も見らんじすんだ。家族がひっそり仲睦まじゅ暮らす 夏の真つ盛りん肥だし。

えーと済んだ馬屋に敷き藁を入れ 汗にまみれた母子ん姿 あん 異国じ戦死した父親に見せたかった。でん盆がもうすぐ思いきって話す時間も そこまじ来ちよる。『手がすべすべする』『じゃろう 別嬪になった証襷で』『ふんと』

67 P…もんじゃき…ものですから。ことのみでん…ことだけでも。シチモロウタヌ…していただいたものを。そしち…そうして。チットデン…少しでも。ムゲノウジ…可愛いそうで。そげな…そんな。チットグレ…少しぐらいは。ヘイチャラデン…平気でも。うっとがん…私の。もっえ…もうよいの。くれたき…いただいたので。ゆうしちよきゃ…よくしておけば。

68 P…青紙招集礼状…軍需工場などに強制的に集める、主に娘などの女性。ソコンシタチ…近くにいる人たち。慰問袋…戦地にいる人たちに皆が送る 日用品などが入った袋で 縦35センチ横25センチ位の定形袋。シタしも…人たちも。

69 P…ムゴトラシイ…見るに見兼ねるような残酷さ。でん…でも。いきつく…精魂つきる。じゃな…ですね。花筒…墓の前に花を供える竹の花瓶。シマイ…仕事の区切りが。ケックシャ…結構。ガイト…たくさん。ガンマク…肥しなどを引っかけて引き出すのに使う農具。コズミ…小さく積み上げた山。オカシュネエ…おかしくはない。もうえ…いのですか。すぐですか。今から。ダリ…疲れが。

70 P…オカチャン…母親。トイモ…甘藷。ツレノーチ…連れだって。うん…はい。すんな…しなさんな。引こじっち…引張りながら。ハリコム…頑張る。クレタンカ…買ったの。ドッカ…どこかに。ヒズネーカ…疲れなかった。オトッ…お父さんと言いかけてやめる。テンショムショ…無理やりに激しく頑張る。ホロセ…刺されて膨れあがる。ふんと…本当に。



『几帳面さがきれい好きにもなる！』

『早えなァ』 家の前は人通りも多い幹線道路。早めに美しくしち自分もじゃが 通る人たちにも気持ちゆう通る。そげな思いが几帳面な性格に 追い討ちうかけちよる。『早めにせんとすぐ多うなるとオカシイコト』 そう言うとなコリ。『そりゃまァそうじゃがユウ続くに 感心しちよるんで！』

言わるりゃ悪い気はせんもん 『おだつりゃどこまじん 上っちゆくき知らんで！』 『いんにゃ オダツルドコロカ 表彰状もんじゃなァ』 『うっとドゲシュウカ まあ茶でん飲まんナ』 『今朝せわしいき 又よばるるわな！』 『そげ急いじ とき行くんな』 『いんにゃ 大根ぬ引きよるき イルナラ取りこんなち言うき』 『そりゃ早う行かにゃ 待ちちよるで！』 『ふんなナ』

よき一出来ると 食べなァちあぐる。あげちよきゃ貰う。それが人間のツツロク人生。日頃ゆうしちよきゃこす 皆んなかるも好かるるもん。こん早起き掃除するしも 気さくな気持ちが好かれ 丁度辻ん家でんあっち 通るしたちが『たべなァ』ち 珍しいもんぬゆう持ちくる。

雨降りどま『すまんけんど破れ傘でんいいいき』 『それこす困ろうきサシチ帰りよ』 『ちょいと靴おいちょいて』 『ありゃ今日は喜び事じゃなァ』 『高え入場券じゃけんど』 『いい事じゃねえな 声がかかると腹がタトゥガエ』 『じゃなァえ！』 ぼんぼん飛びだす話しも ここじゃき言えるるんか。

家ん前かる隣ん倉庫ん前 寺ん石垣ん前まじ掃わくと 腰うのした。『精が出るなァ』 『おおきに！』 顔馴染み 知り合い隣近所んしとん 話し語りはオオモト博学でんあるき 機転も聞いち飽かせんもんじゃき 立ち話もはずうじよる。

『こんだん祭りんニワカに加勢しちくれん』『又え ウットんじゅうじゃ悪いこたねえ』『ほんな誰に頼むんな』『まあちった搜したんかえ』『搜しよったら あんたがおった』『また調子んかお言う』『いいじゃねえな やっぱ顔が揃うんがいいんと 会長さんが言いよったんで』

無理に押しつけてん嫌いじゃねえ。犠牲的な心もあつたき『あんたかる言わるりゃ もう断われんなあ』二人は大声じ笑い そんまま家に入った。もしかすりゃ言わるるかんちシコはしちよつごたる。風呂敷包みんはじかる 菅笠がチヨコット見えよつた。

唄もうまいし書かせてん負けん 話も聞く耳も達者じゃき 役も起用されち 責任感も強いもんじゃき さっと取りしきる天性も持ち合わせちよる。『さあやるちなりゃコイサどま打合せすんな』『へえかるえ』『じゃつち早えがいいんじゃねえ』もう乗り気の虫がムズムズしよる。

夜中に近所ん若嫁ごがトントン 戸を叩きよる。困つた時はいつでん裏かる戸を叩いち起こしよち 言うち聞かせちやるもんじゃき コイサおいでなさつたごたる。『まああがりよ だまっち来たん』『…………』 黙っち俯いた。乱れた髪をそつと撫でちると 『おばさん』

夜は長えけんドイツマデン そりゃまた悪い結果にんなるき 詳しゅ聞くと秘法を聞かせち えーと本人も胸撫でおりいた。『まあいいんな』『うん 時にゃ困らせチャラニャ。』『ほうほう 元気印に火がチータカナ』 ホット安心した。夫婦喧嘩は犬も食わんたあ まさにこんこつ。

次ん朝おけのに来た嫁ご 『早いなあ ヤデンナご免』

顔色ぁいいし言うこたぁ 弾んじよるき『ははー』安心した。『どげーじゃたな』『遅かったもんじゃき ちった心配したんか 湯に入ったんか ぬるかりゃ燃やしちゃうど』と。そん挙句にゃニジリヨッチ来る。そん様が手に取るごつわかった。でん あん時ゃヤッパ悲壮そんもんじ ムゲナカッタが そかぁ夫婦じゃユウシタモン。

『早っイナント』『もうイヌンノ』 現金なもん それまじ言うと飛っじ帰った。お蔭じ掃除が遅れちしもった『ふんともう』 見送っちゴミっ集めち 今朝ん行事ゃ終わった。

『そうじゃ 今日踊りっ頼まれちよる』 創作も出来る趣味が時にゃ役立つ。習う舞踊も年季が入っち舞台を 会場に華を添えるんも 得かん知れん。年っ重ねてん起用さるる人間の 『しあわせ』は老け込ません 妙薬かん知れんち心にゃ 感謝する気持ちがいっつも 現れるるもんじゃき声も期待もかかる。

小雨でん早めに掃わく事じ 塵も無え道にゃいっつも通る人たちゃ感謝ん念が稔っちよる。『さかしいかえ 焼き米ついたで食べて』 紙包みに入れたほんの 一握しん香りんいい焼き米が 季節を運んじくれツツロク人生を 潤しちくるるんも人柄が滲み出ち 今日も天気がいい青空。

あれかるもう何十年になるか 道ん土もで一ぶへコンダガ心ん 膨らみぁこりゅう見て 豊かに膨らんじよるで。じゃきサカシュウジやり遂ぐる 気力も湧いちくるんじやろう。限られたたった一度きりの人生 でん心が豊かじ有意義な毎日ならそりゃ又違うた答えも できるじやろう。今朝も美しゅう箒目ん美しさが 目に染むごたる 朝ん日ざし。



72 P そげな…そんな。かけちよる…かけている。オカシイ  
コト…恥ずかしい事。そりゃまゝ…それはなるほど。  
どこまじん…どこまでも。いんにゃ…いいえ。うっと  
…私。ドケシュウカ…どうしましょう。イルナラ…必  
要なら。ほしいなら。ふんなゝ…それなら。あぐる…  
あげます。ツツロク人生…行き来する親しい仲。ゆう  
しちよきゃ…よくしておく。破れ傘…たとえ破れて  
いても。サシチ…雨避けにして。じゃなあ…ですね。  
おおきに…ありがとう。オオモト…元はと言えば。

73 P こんだん…今度の。ニワカ…狂言、芝居。ウットンジ  
ょう…私ばかり。シコ…準備。チョコット…ほんの少  
し。やるちなりゃ…するのであれば。コイサ…今夜。  
けんどイツマデン…ですがいつまでも。まゝいいんな  
…まだよいのですか。チャラニャ…あげなければ。チ  
イタナ…着いたですか。ヤデンナ…昨夜は。おけの…  
起きたばかりの。

74 P しよるき…していますから。どげーじゃつた…どうで  
した。ヤッパ…やはり。ユウシタモン…よくしたもの  
で。イナント…帰らないと。もんじゃき…ものですか  
ら。さかしい…健康。元気な。焼き米…早めに刈った  
米を煎って殻を外したもの。でーぶ…だいぶん。でる  
じゃろう…出ることでしょう。



芯の通った女性の心は 強く優しく逞しく 情愛の強い底力を温存している。女であり娘となり 姉妹であり 婚しては嫁となり 姑となり女神になって行く。

健康であっちほしい 睡眠、朝食をちゃんと食べ タバコは避け酒もほどほどに。運動を欠かさんごつ 間食を控え 太り過ぎにゃご注意を。自分じ健康管理をな。

神から与えられた健康に留意 一日一笑は長生きん秘訣じあり 心豊かな有意義な人生を 謳歌しちこす 幸せの原点である。自分じ守る責任こす 人間の生き方じゃろ。

千人針が命びらいした そげな話しも聞いた。ご苦勞されち無事復員したからにゃ これから病氣せんごつ 長生きしちそん分ぬ 取り戻しちもらいたいもん。残った人生を存分に生かした たった一度きりの 人生を有意義にしちこす 生きちょつた証でんある。

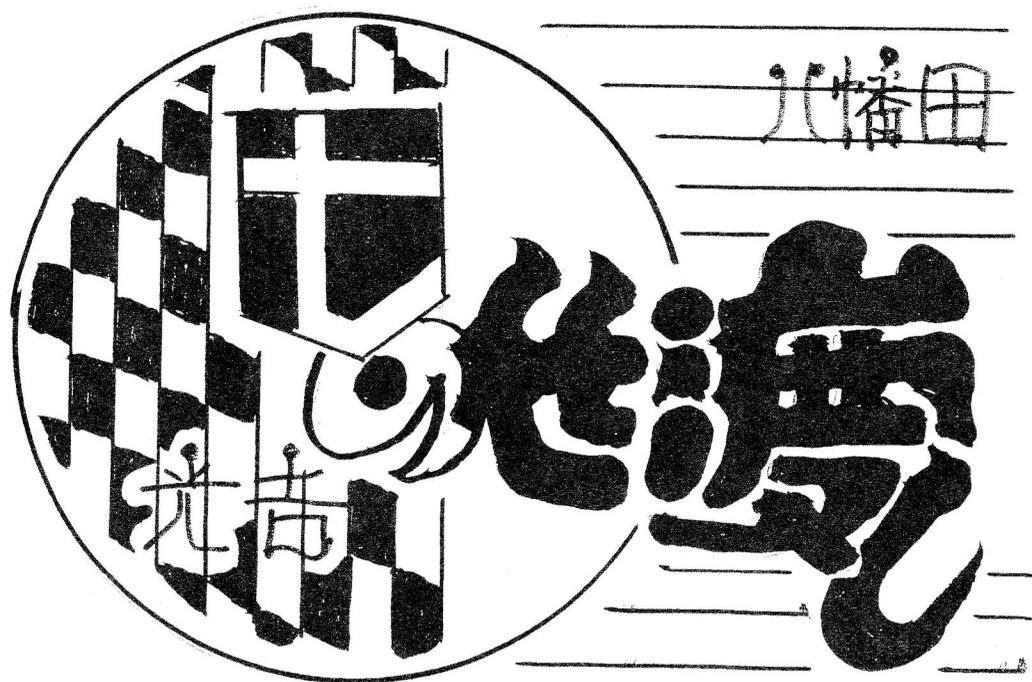
今年しゃ干支は『牛年』 昔かる人間にとっち 重要な家畜じゃつた。じゃき大事にもされち来た。学問の神様じ有名な『天神様』ん お使いとしち尊ぶのんそげな訳。

お釈迦さまが亡くなった時 一番先に駆けつけたんが牛じゃつたが 着いた途端に頭に乗っちょつた ねずみがヒョイト飛び降りち 1番になったき干支頭になった。けど『お釈迦様』はちゃんと 知っちょつたき 『2番でん食事ん時寝ち食うてんいいで』ち お許しゅう貰うたそうな。もっともネズミゃ『食い物に不自由させない』ち 許しがあつたとか。それぞれん話しん源にゃ 心う潤うごたるもんが多い。『狸8相』ん話しえ そりゃ又あとじな。

# 五助ものかたじ

五助ものかたじ





いよいよ参勤交代ん行列は 小林寺を後にしち他領ん多い地区  
を アンゲコンゲ縫いながら 7つ目ん瀬に向うち 歩きはじめ  
た。チュウテンでーらが これかるは多いき楽な道中。木の上か  
る…田島…市…雄城…八万田…そしち7つ目ん 瀬を越ゆりゃ  
もう天領ん光吉。昔じゃ赤坂川じゃつたが 7つん瀬を渡るき  
『七瀬川』になった。

響きがいいし景観もいい そりーデー道とキチョリャモウ 眠  
つちよつてんいい。駕籠が揺れたち思うたら 天領ん光吉ん街道  
に入った。整然とした町並み 大けな屋並みが目を見張る。瓦屋  
、醤油屋、帯屋、錦屋、道幅も4間が一本道に続く。物静かな中  
じ ひときわ賑やうんが 荷駄ん鈴ん響き。

§ あん娘年ごろ 姉さんかぶり いつか覚えた馬子歌を  
七瀬のせせらぎ 若葉がチラホラ ホイホイホイ §

なんぼ54万石でん他領を 通る時あそれなりん 心づけはシチョカントやっぱなあ。延岡領、臼杵領、こんだ天領とまあここへんなヤエコシカッタ。大けな淵ん下手に瀬があっち 木の橋がかけちやるが 行列が通るとなりゃ地区ん 人たちん心づけん橋がカケチャツタ。

『コレ忘れんごつせにゃ』『ははー』そこはアウンの呼吸。竹田に運ぶ荷が出来ると 馬ん鈴がシャンシャン鳴り 人気があるき皆んなが見送る。時折若い娘たちも見送り来ちよる。野津原かる鶴崎に向かう 野津原馬荷は鈴がねえが そんな変わり馬子歌があった。

§ 向こう光吉この瀬を渡りゃ 帯屋達者か目に浮かぶ

ハ 七瀬のせせらぎ もみじがチラホラ ホイホイホイ

馬子同志も顔なじみなっち 情報交換したり時にゃ喧嘩もあるがヤッパそれぞれがイノチキ 悲哀も喜びも 分かち合うんも人生双六じゃろう。『もう行くかえ』『今日は竹田泊まりじゃき』『ひっぱりこまれんごつせにゃ』『じゃなあ』 笑い声が周りんしたちゅ 笑いの輪にさそいくうだ。

街道をまっすぐ進んじゆくと 道は左曲がる。とすぐ前にゃ大けなお庄屋屋敷があった。前庭に泉水が美しい影を写しち 行列ん時にゃここじ『お茶』んオモテナシ。奥まった部屋にゃ今年ん新しいもち米じ ついたんか餅がお盆にのせられち 座った賓客に出されちよつた。

見渡すかぎり広い畑ん中に 静かな空間が時代の流れん中じ一時ストップしちよる。天領地らしい広い街道を 人ん行き来する暮らしん音が響いちよる。そんな路傍に天保11年《1840》お奉りされた 『お大師様』が赤いヨダレカケを 受けて

ゆう似合う姿は何も言わんけど 人の悩みを軽め無病息災を 念じちくると お参りが絶えないんじゃろう 花が手向けられ香が焚かれちよるんが 人間の弱さもかいま見る。じゃが人間の助け合い支え合いは 強いものじゃき 自分一人ん心じゃ貧しい事 そこに自然に変わる善意の社会。

瀬を渡っち川べりを進む 土手に上がる こんだ竹山ん中を道が続く。竹は河川が荒れてん 道が痛まんごつん 生活ん知恵じゃろうがそん 道普請も地元んしの まさに『お接待』かん知れん。人はどこかじ世話になる じゃき地元に来たしの 無言の世話はさせてもらう。これこそ助けあいん信じゃろう。

ひょろと昨日竹田に運っだしが 『思わぬ祝儀があっち』と笑顔がこぼれた。『そりゃ中身はチットデン』 家計の足しにもなりゃ子どもは ワキャガルホズ喜ぶ。とぼした火が特別に明るかったち言う。銭取り少ねえ時にゃ ほんのチョコットがどんくれ嬉しいか。

馬子たちん話をきくと身にツマサルル。稼ぐに追いつく貧乏なしんごつ 働いちよきゃイコトモある。今夜地主さんが 『お日待ちするき 皆んな参って』ち ふれがあったき。話しが毎年ん事ながら嬉しい。晩になるとコシラエチ 皆んなずり行くこちなる。秋ん収穫に太陽に感謝する祭り。光吉でんコイサする。

太陽んお陰がありゃこす 作物も人間が生きちよるんもと お祭りしたあと 朝ん太陽を拜んで又今日も頑張る。人間本来ん心の祭りでんあろう。所じゃ地主さんが小作人に 一年間の苦労に感謝しち太陽ん祭りの ときに接待しち家族にも 土産をことずける習わしが続くとか。内容は違ってん心の思いは同じ情愛から生まれた行事じゃろう。



光吉は天領地じゃつたき 街道も素晴らしい整備ん跡 宿場ん  
ごたる面影が今も点在しち 荷運び馬が鈴を鳴らした早朝 竹田  
久住に向かうんか なりゃ今市う通るんじゃろう。野津原からは  
坂道が続くが これがあるき駄賃がちった いいそうな。馬方に  
しちみりゃ 笑顔もこぼるるが 馬はさぞやヒズカロウ。

§ § 肥後か府内か 一の瀬渡りゃ  
お国訛が なつかしい ハ 七瀬のせせらぎ  
サラサラサラサラ ホイホイホイ § §

§ § 神楽囃子に 更け行く夜は  
濡れて見たいな 鈴ヶ滝 ハ 七瀬のせせらぎ  
小鮎がスイスイ ホイホイホイ § §

光吉ん馬ん鈴音は 当時有名じゃつたき 若い娘たちゃ わざ  
わざ休みん時にゃ 見に聞きにきよったそうな。ここにゃ今でん  
醤油屋、帯屋、錦屋、なんかん屋号が保存されち 当時栄えた  
夢やロマンが浮き彫りされちよる。そげな広い地を進むと 鶴崎  
に通ずるんも 次は浪花、江戸ちなる。

ここじゃ大火事もあっち 地域全部が焼ける痛ましさ。そこじ  
そん霊を慰め二度と 火災がないよう念じた 愛宕火伏大権現を  
創建お祀りされてある。当時をくり返さない地域の 人たちの心  
こめた執念はその後 火災がないと言う。幸せな里として今も  
継承されている。人の心暖まる取り組みは 高貴なものでも。

七つの瀬渡りした肥後街道も いよいよ後は鶴崎に入るが 時  
の流れに人の心は素直に従う 従順な営みは平和にも結びつく。  
春先の川の土手に馬を繋ぎ 束の間のひとよこい。五助もここでも  
顔馴染みが多くて 働き者が休むと『やまいでは』ち 心配し  
ち顔を覗きこむ一幕も。



★★ 方言説明 ★★

- 77P アンゲコンゲ…あちらこちらと。チャーテン…申しまして  
も。デー道…平らな道。キチョリャモウ…なっていれば。
- 78P シチョカント…しておかないと。ヤエコシカッタ…難しか  
った。カケチャツタ…架けてあった。コレ…祝儀。ヤッパ  
やはり。イノチキ…生活。ひっぱりこまれんごつ…誘惑さ  
れないように。じゃなゝ…ですね。ここじ…ここで。つい  
たんか…ついたのでしょう。ヨタレカケ…前かけ。
- 79P 川べり…河川敷。こんだ…このつぎは。じゃき…ですから  
。ひょろっと…急に。チットデン…少しでも。ワキャガル  
ホズ…賑やかに騒ぐほど。チョコット…すこし。お日待ち  
…太陽に感謝するお祭り。ずり…連れなつて。コイサ…今  
晩。
- 80P 天領…幕府の領地。ヒズカロウ…お疲れさま。そげな…そ  
んな。ここじゃ…ここでは。そこじ…そこで。やまいでは  
…病気では。

人の優しさ心の花が

『五助さんの馬子唄 聞きたいわ』『唄って聞きたい』 あん  
まり言わるるもんじゃき ここまじ来ちよつち 唄わにゃちつと  
勿体ぶちちよるち 思われてん困ったコンニャクになる。五助さ  
んな思いきっち 『ふんな唄わせち貰うで そん代わり下手じゃ  
きな 覚悟しちよかにゃ』 『なえアゲンコトンジョ言うに』

五助の唄う馬子唄にゃ ホロリさせらるる妙味が あっちもう  
うっとりしちシモウタ。土手にゃ春んポカポカ陽気な風も。

うっとり聞いちよる娘たち 七瀬川ん水音がサラサラ流れちどこまじ行くんか。ふっとそげなこつう思うと 五助が語りん中じ『みよ あげな静かな音じ流れよるが 時としち濁流になったりもする。時にゃ枯れちしまう事もある。浮き沈みは川だけじゃねえ 人間も同じこつう言えるんど。

今は元気でん病気もする 怪我もする。じゃがそりゅう乗り越えちこす 価値もあるんが人間じゃき。サカシュしちよるんが一番いいし いつも前向きなイノチキが 幸せに近づく方法んごたる。人ん為になる出来る世話は しちあげる。それによちち自分もしちモライダス。世の中助け合いん『つつろく人生』ど。慎重に聞いちよつた娘たちも 世の中そげー甘うねえこつも チッタわかったようじゃ。

『こりゃちっと難しいか』『いんにゃユウ解ったわ』『そうか よかった』 固唾飲んだごたる顔が 明るうなつたきホットした五助さんも。『光吉ん話も残ちよつたのう』『いいで勇じいさんが話しちくるるち』『やーほんなもう鬼ん首取つたような もんじあのう』

勇じいさんがテクテク来よるき 話しゅう俺も聞こうかの』

“ “ “ 方言説明 “ “ “

8 1 P ふんな…それなら。もんじゃき…ものですから。シモウタ…しまった。

8 3 P セクモンジャキ…急ぐもんだから。ゲンノショウコ…薬草。ソコラキンペン…そこらあたりに。ソリャモウ…それはもう。3者の…3人がお互いにかばいあって助け合う生活方式。

8 2 P モライダス…報いがあるもの。



溝を踏み越えてんもう 風習も言葉も違うんが 小藩分立ん  
悲しさじゃつたが 心が通い合うんならそれも 又別な世界も  
あっちお互いが イノチキスル仲にゃ 助け合う支え合うのん  
あってん 不思議でんなった。『腹がセクモンジャキ』『そり  
ゃ困ろう ゲンノショコがあるで』

薬草は百姓しの常備薬 それじ急場は凌げる。お医者じゃつ  
ちソコラキンペンに あるのでんねえし。かかったらソリヤモ  
ウ錢仕事。富山ん入れ薬屋が おいた薬箱は急場んお医者さん  
じゃつた。時折入れ替えに来ち 錢が払えん時でん 待ちく  
れもするし時にゃ 『小豆なら代わり貰うで』となる。

薬屋さんも見兼ねちん方策 そりゃ宿に引き取っちもらい  
清算する事じ3者の 助けあいになる。街道も広い場所 狭い  
道とそん藩によっち 多少ん誤差もあったり 管理にも段差が  
あったが どこも経済が厳しいだけに 参勤交代制度も問題が  
あったが そんはんめんにゃ全国ん 経済文化ん交流や 技術  
情報ん流れもそれに乗って 全国にひろがったよう。

湿地帯あり乾燥地帯あり 砂ほこりが舞う 風当たり陽あた  
りなど季節によっても 好きな道や嫌いな場所など 街道にも  
いろんな場面展開が 醸し出されていた。茶店に不便な所や  
用足しが不便な場所なんかも 旅人にゃ苦勞の多いこと。でん  
のぞかな田園風景に恵まれた こんあたりん景観な誠 絵にな  
ったようじゃつた。

八幡田ん渡しは田尻より下がった 光吉当たりん直線越え。  
流路が変貌するが そん証ん石柱が残っちょる。それによると  
『從此川中西日杵領』とある つまり川の真ん中が境界である  
証ん 石柱じゃつた。大分川や七瀬川んたんびたんびん 氾濫  
じ流れも変わりよったんが ゆう解る。

7の瀬渡しはこげなうに 1の瀬かる受け継いじ辿りついた。  
行列も他領地を気を使いながら きっと無事にと念じながらの  
時の流れであったのだろう。制度そのものはやがて 改正される  
が幕府の政策としては なかなかやりおったと思う。だから徳川  
300年が続いたのだろう。功罪いろいろあったが。

七瀬川もそんな歴史を見ながら 参勤交代行列の行き来を見る  
時 その裏側で領民は勿論 隣接領地の人たちとの 好誼がどこ  
まで実ったのか 差別不公平はなかったか 改めて考えさせられ  
ます。が時の行政に任せるほかない 流れの中でいかに幸せに  
過ごせるかは まだ疑問も残るようです。黙って流れる七瀬川  
じっと見守ってくれた 水は我々の常に味方であり 協力者であ  
ったと感謝しています。

#### 七瀬川愛歌

七瀬川は 私の母 育ててくれた 湧き水が  
肌にはんどのり 紅を指すのか 瞳も濡れて  
つる草 まりつき 童唄

七瀬川は 私の父 叱ってしれた 厳しさに  
瀬音やさしく いつか別れの 切なさ つらさ  
若鮎 馬子唄 丸木橋

七瀬川は 私の故郷 愛してくれた せせらぎが  
明日の夢を しあわせと 胸に抱いて  
山ユリ 夕焼け 子守歌



七瀬川といつまでも 幸せにありたいものです。7の瀬渡し  
もこれからも 多くの人たちのために……………。

少言多行…ショウゴンタギョウ 多くを言わず実行する。  
少塩多酢…ショウエンタス 塩分を控えて酢を多く使う。  
少食多嘔…ショウショクタソ 食べるはほどほど多く嘔む。  
少車多歩…ショウシャタホ 車利用はさけ歩く事に。  
少念多笑…ショウネンタショウ 考え過ぎず大いに笑う。  
少欲多施…ショウヨクタセ 欲を離れ施しの気持ち。

1 感謝する心。2 支え合う情。3 大事にする優しさ。

相手の欠点を捜す事なかれ それは自分の姿を写した鏡でもあるから。穏やかな表情を人に与えるのは 自分も和やかな話しかけを 待っている自分の心でもある。優しい目で相手を見つめると 心の浄化が自然と作り出されて 素直な思い考えに変わる。人間はみんなそう思っているのに 意地が邪まな理屈が邪魔をしている。不幸と幸せはまさに 紙一重の人生双六でんある。

信楽狸にゃ 8 相ん縁起があるとか

笠…思わぬ災難悪事除けじ 常に身を守ってくる。  
目…前後左右を見つむる事じ 正しい判断ぬしちよる。  
顔…広く愛想ゆう真をもっち 暮らし励むち言う。  
徳利…恵まれた物に感謝すりゃ 徳は自ずと我につく。  
通…信用によった活動は 四方に通じ叶えてくれる。  
腹…落ち着きの証 決断力の原動力。  
金袋…宝の独占は心乱す 運用こそ宝の秘訣。  
尾…大きな終わは 立身と真の幸せ。

そんように思う信ずることが それに近づく道でんある。人間も生まれた時は素直じゃった。皆んなその後ん歩き方に生涯ん 宿命、運命が変わっち行くもん。それは自分じ直す鍵を知っちよる。ただそれをするか、せんか、だけん話し。

五助さんがん話が弾むと日暮れが もう西ん山にかか  
ちちセワシユなった。『ぼちぼちイヌルカノウ』 馬が  
『ほら見な 袖売りよるき 忙しゅなったじゃろがえ』  
『わかった解った』『もう帰るんな ほんなぼちぼち  
馬子歌どまどげーな』『や 今日ほかん唄にしゅうか  
のう』 暮れかかった肥後街道にゃ やっぱ五助ん唄が  
ゆう似合うんじゃが………

おぼね街道にポツンち咲く 里人ん情愛は旅ん草鞋も  
腕がする 優しさがあつた。手盆でんいい真心んこもつ  
った餅 『ウマカッタ』ち言う前に 『ウシマケタ』チ  
仄かんロマンを込めち 素直に返す。そき一人ん気持ちが

竹んさや揺れ こぼれ陽くぐりゃ  
馬子も嬉しや こん石だたみ  
赤いボクリん ひびきに旅ん  
草鞋ぬがせた おぼねん宿は  
あれが今市 肥後街道。

久住のつはる 縁じ結ぶ  
お国なまりん こん石だたみ  
四百年得た《シヒャクトシエタ》 味ある中じ  
寄っちいかんな 手盆の餅は  
牛が負けたち 肥後街道。

行き来するツツロク人生。ふっと聞こえる馬子唄は 石  
だたみに心地いいリズムを 奏でち旅ん疲れも癒しちくる  
る今市宿。オサゲン娘ん笑顔が 赤えボクリ下駄を鳴らし  
ち 馬子唄に調和した エエラシイ唄。心ん底まじ染みこ  
むようじゃ。



# 野津原方言單語



う…ウレメーデン……………売れなくても、熟さんかも知れないが。  
ウレンズキジ……………売れないままに、熟れないままに落ちた。  
ウレソコネチ…熟さないまま、買い手が逃げて、売出し失敗。  
ウレデータ……………熟してきた、売れ足がよくなった、熟した。  
ウレタナイイガ……………売れたのはよいが、売れた後の世話が。  
ウレンゴタリャ……………売れないようなら、売れねば工面を。  
ウローウテ……………蒸したら返して、天地を逆転する。  
ウローミシィ……………裏側を見せて、裏を見ないと、裏に用心。  
ウロードチ……………売る予定になって、売り急ぎ、売る適機。  
ウロタユンナ……………慌てないように、落ち着いて見極める。

ウロタエマワッチ……………慌てまわって落ち着きがない、恐怖感。  
ウロウロシチ……………落ち着きのない動作、動き回る浮遊性格。  
ウローアチ……………裏当てをして、裏面に補強して、支えて。  
ウロツキマワッチ……………落ち着かずうろうろする、動き回る。  
ウロイ……………湿りが出来た雨、潤いのある状況、干天に慈雨。  
ウワミダ……………上にたまった水は、汚れの浮いた水は。  
ウワズミュ……………上に浮いた分は、浮き上がった汚れ水は。  
ウワンソリー…真剣聞かず、聞いているのか、聞くとはなしに。  
ウワツロ……………上にある部分は、うえの分は。  
ウワブンニャ……………上にある分は、余分な物は、予想以上は。

ウワクチャ……………上の口は、しゃべりの最初は、下ではないよ。  
ウンノイイヤツ……………幸運な人、巡り合わせがよい、幸せな。  
ウンチュウタニ……………よいと言うたのに、了解と返事したのに。  
ウンウンケバッチ……………力みすぎて、思い通りに行かずに。  
ウンガワリー……………不運、巡り合わせが悪くて、失敗の果て。  
ウンコンカタマリ……………大便の固まり、糞の固形。

え エート……………やっと、長びいたが、待ちどうしかったが。  
エートンコチ……………やっとのことで、やっと出来た。

え エーシコ…よいぐらいに、予定とおりに、思った通りに。  
エイトコリヤ………やっとの思いで、つかれたけれど。  
エエラシイ………可愛いらしい、愛らしくて、本当に。  
エエト………やっとの事で、無事に終わって、予定通りに。  
エエタラ…あいたら、疲れたなら、開いたら、空いたら。  
エエコラ………やっとの思いで、なんとか終わったが。  
エエクレンコツ………いい加減な結末、あまり信頼が。  
エオクヤムゲネー………餌をたべていると可愛いもの。  
エオスギー………柄を取り替えて、柄が丈夫でないと。  
エオトルネキジ………餌を食べている側で、動物の食事時。

エオトリヤウ…餌を取り合いながら、食べ物の恨み怖い。  
エオケーチクンナ………絵を書いてください、絵を書いて。  
エオツクラニヤ………餌を作らないと、餌の調合をして。  
エカキャ………絵かきは、柄を取り替えるのに仕上げる。  
エガウミセチ………笑顔見せて、愛らしい笑顔、笑顔千両。  
エガワイイデ…笑顔百難隠、女性は笑顔、笑顔に敵なし。  
エガム………曲がる。直線でなくなる、少し曲がったよう。  
エガメ………曲げて引く、曲がった線を引く、曲げておく。  
エギノン………苦すぎて喉をほる、苦さが堪えられない。  
エギナル………苦くなってしまう、柄の材料になりそうだ。

エギスリヤ…柄の材料にしたら、柄に適当なのは少ない。  
エグジョル………曲がっている、曲げてある、曲げた特徴。  
エグウデン…曲がっていても、曲げ方では、曲がり品。  
エグッチカル………くり抜いてから、特殊加工した珍品。  
エグルネキジ………くり抜く側で、穴あけの技法。  
エグカリヤサラセ………苦すぎるなら晒して、晒の効果も。  
エグカセ………絵の具貸して、絵の具を借りたい。  
エグブミタカ………えくぼの可愛さ、笑顔によく似合う。  
エグネージ………苦くはないが、どうやら熟れたのか。

え…エゲツネエ……………いやらしい、嫌われる性格、あくどい。  
エゴイイワナ…ほ笑顔がよい、愛らしい笑顔、笑顔千両。  
エゴジョルニ…曲がってる、横曲がりして、直線でない。  
エコヒーキ……………邪まなひいき、片寄った味方になる。  
エサーヤッタカ……………餌はあげたの、餌をくぼったの。  
エザンシャクル……………枝が折れそうな、枝が折れるように。  
エサバクウ……………餌入れの箱、餌をいれて食べさせる箱。  
エサドマ……………餌なんかをあげたら、餌を忘れないように。  
エジガル……………怖がる、恐ろしがって、恐怖心になって。  
エジュヤレ……………餌をやりなさいよ、得たをきちんとあげよ。

エジグレ……………餌くらいはきちんと、餌をわすれないように。  
エジキナッチョル……………旨く相手に捕まる、相手に捕まって。  
エズナリヤ……………怖くなれば、怖いようなら避けなさい。  
エズナッチョル……………怖くなっているから、怖いものには。  
エスグリヤ……………よすぎると、必要以上に素晴らしいと。  
エスローチ……………適当に相手して、旨い具合に相手して。  
エスラウナ……………相手にしないが得策、取り合わないがよい。  
エソラウナ……………抵当につき合って、上手につき合ったら。  
エダイイガ……………枝はよいけれど、枝は大丈夫。  
エダシャクル……………枝が裂けそうで、枝が大丈夫か。

エダマジユ…枝までも、枝は大丈夫と思う、枝は世話ない。  
エチラッコ……………調子を取る合い言葉、あっちこっち。  
エツリュ…土壁の芯に使う竹格子、竹を組んだ土壁の芯。  
エッチラ……………疲れたときの相づち、あっちやこっち。  
エツリタキヤ…土壁の芯に使う竹、竹を組み合わせた壁芯。  
エツッタ……………竹と縄で土壁の芯を組み合わせる。  
エツク……………餌にうまく食いついたよう、餌になじんだ。  
エッサエッサ…かけ声、勇気つけるかけ声、思わず元気に。  
エデンクワニヤ……………餌でも食べないと、食べさえすれば。

え…エテコー……………猿、猿の方言に使う。  
エトガシラ…千支一番でネ、ネがなで千支頭になったのか。  
エトン……………柄とも、絵かもしれない、絵だろうと思う。  
エナラスンダデ……………餌ならやりましたよ、餌ならくぼった。  
エナラヤッタ……………餌はやりました、餌をくぼって。  
エナンカ……………絵などは、餌などは、柄ならば取りつけた。  
エニスリヤ……………柄にすれば役立つ、絵にすれば額縁に。  
エニャナラン……………絵にはならないが、絵にするほども。  
エニドマ……………絵にしておけば、柄にするならしまって。  
エノチョウグ……………色絵の具、クレオン、クレパス。

エノスゲカイ……………柄の取替えに使う、準備しておくと便利。  
エバッチョル……………威張っているが、威張っても中身が問題。  
エバリクサッチ……………威張りちらして、人は偉いとは思わぬ。  
エバグレトレ……………くもの巣を取り除いては、くもの網が邪魔。  
エバニャコマル…蜘蛛の巣には迷惑、蜘蛛の網は頭に邪魔。  
エバチュウテン…蜘蛛の網と言って、蜘蛛の巣と言っても。  
エビンゴタル……………エビのような、エビのように曲がって。  
エビュツケニャ……………荷札をつけないと、表せんを付けて。  
エビンネキ……………荷札の側に、荷札と同じ場所に。  
エブツケタカ……………荷札をつけましたか、荷札付け終わり。

エブモイジョケ……………荷札は取り外して、荷札は取って。  
エブンシワキ……………荷札を分類して、荷札を仕分けしたら。  
エボリネェゴツ……………柄のところから雨もりがないか。  
エボッチャワリー……………柄漏りは不良品ですよ、品質検査を。  
エマジクワン……………餌もたべてない、食欲がないようだが。  
エモクエレン……………餌も食べれないようだ、食欲不振。  
エモクウタド……………餌を食べていた、食欲が出たよう。  
エヤラエート……………やっとの思いで、やっど目鼻ついたが。  
エヤリヤ……………やっとの事ですんだ、やっど区切りが付いた。

え…エヨリヤ……………柄よりも、餌さよりも、絵よりも。  
エラブリヤイイ……………偉いぶったところで、人が言わないと。  
エラドマ……………うろこでも取ったら、うろこに見こたえ。  
エリヤー……………襟は、襟の品がいい、襟元に色気があるから。  
エリスゲテン……………選びすぎても、選別は難しい、第一印象。  
エリヨリヤ……………選んでいると、選別して間に、目がこえて。  
エリアゲチ……………選び過ぎてついつい、何でもほどほどが。  
エリキジ……………磁石で調べる、磁石を利用した発見。  
エルナッタ……………偉くなったと思うのは、偉さは人が決める。  
エレブル……………偉いと言うけれど、人が認めないと。

エレブッテン……………偉いと主張しても、知れた程度の人間。  
エレクレ……………誤魔化し、技にかかって失敗する、油断大敵。  
エレヤッチヤ……………さすがに偉い、たいした人間、立派な者。  
エレコチャネエ…大変な事に、疲れてしまって、苦勞万敗。  
エロブッチ…えらぶっているが、自称偉人では。自我自賛。  
エロノーデン……………偉くなくても人は知っている、人が確認。  
エロデン……………偉くても実行力が、偉い範囲が別れ目。  
エロージョリヤ…選んでいれば、選別が大切な、期待満塁。  
エロー……………大変に、大事に、予想以上に、思わぬ成果に。  
エレジャロウ…偉いじゃろうと自慢したが、手褒めじゃな。

エンコ……………おすわりしなさい、座って、疲れて座った。  
エンリョスンナ……………遠慮しなさんな、遠慮無用ですよ。  
エンリョヒモジイ……………心にもない態度は損もする。  
エンドマ…縁先なども、縁があったのかも、円を書いたら。  
エンデン…縁先でも、縁があった巡り合わせ、再会出来て。  
エンドマミュ……………グリーンピース、エンドウ豆を。  
エンノシテ……………縁板の下に、縁先の内側に、縁の下側に。  
エンジャキ……………縁ですから、巡り合わせの人生だから。  
エントタ…煙突は掃除したの、煙突の煙りは出ているよ。

お…オーキニ……………ありがとう、感謝の言葉、ありがたくて。  
オーネガ……………大本が、もともとの、生まれた時から。  
オーセン……………荷物を乗せて行く準備が、仕事が進まないで。  
オーチャクン……………肉たれな態度、嫌われ者で、態度が横柄。  
オーサビ少し……………少ない感じ、目方を誤魔化して。少し酸味。  
オージュギワ……………結果的に諦めない、最後が嫌われて。  
オーテン……………追っかけても、追い払っても、追い回しても。  
オークウ……………竹で作った担い棒、至便な担ぎ農具。  
オーメシグイ……………大食者、働き盛りの旺盛な食欲。  
オーナベ……………大きな食事準備の鍋、大人数の食事準備鍋。

オアリン……………終わりの、最後の、仕事終いの、仕事の区切り。  
オアセチョケ……………子守させておけば、荷物を積んでおけば。  
オアングツ……………追わないように、追い払わないように。  
オアニャ……………追わなければ、追いかけないなら、追放しない。  
オアリャイイニ……………終わればよいのに、最終になりそう。  
オアンデン……………追わなくても、追いかけてなくても。  
オアカリュ……………神仏に灯明を、ローソクを灯して。  
オアユビュ……………親指を、親指だして合図する、親指相撲。  
オアガリ……………上がってください、食べてください、上に。  
オアリン……………終わりの、最後の、閉幕の行事、締めくくりは。

オイチョキヤ……………おいてあれば、そこに置く、預けておけば。  
オイカキ……………追いかけて、追いかけてなさい、追跡する。  
オイテキボリ……………留守番させて、内緒で外出、置いたままに。  
オイツムリヤ……………追い詰めてしまうと、最後にしては悪い。  
オイチクンナ……………おいてください、預かってください。  
オイクウジ……………追いこんで、囲いこんで、押し込めて。  
オイウチャ……………追加するのは、余分に追加して、上乘せする。  
オイデーチ……………追い出して、追放すれば、外にだして。  
オイチャーテン……………置いてあっても、保存しても、無用品で。

お…オイチータ…追いついて、追いついたけど、これからが勝負。  
オイチョケ…置いてください、置いてよいです、そこに置く。  
オウケネエ……予想より少ない、溜りが悪い、案外少なくて。  
オウチャクナ……自分勝手な、嫌われ者、言うほどにはない。  
オウタテン……逢っても、おんぶしたものの、再会しても。  
オウカタンコツ……大体の事は、予想通りの、標準作業で。  
オウナ……追いなさんな、追わなくてもよい、追っかけ無用。  
オウチョキヤ……追いかければ、背負っていれば、逢ってれば。  
オウチクリヤ……追いかけてくれば、逢ってくれば。  
オウクレワ……追うくらいは、大飯を食べるくらいは。

オウカンデン……大きな道路でも、国道級の道路でも、幹線。  
オウカンニヤ……大きな道路には、国道には、王様の冠には。  
オウカンカル……国道から、幹線道路から、大きな道路から。  
オウケンゴツ……大きな事で、沢山の、大変多い様子、大話し。  
オウゲナシ……大人のくせに、大きな人の、成人のくせに。  
オウコゲツ……小さい経済観念、けちんぼうな性格、嫌われ者。  
オウチョリヤ……逢っていれば、逢うのであれば、残念な。  
オウテン……逢っていても、具合よくあっても、合うが違う。  
オエヤ……追いなさい、追いますか、追ってもいいの。  
オエテン……追っても、追うのはよいが、追うのが得策か。

オエルリヤ……終わるけれど、終わったのだが、終わった後の。  
オエメートン……追わないけれど、とても相手にはなるまい。  
オエンジョキヤ……追わなければ、追えなくても、追わねば。  
オエトーテン……追いたいのだが、追えたいのは山々だが。  
オオケンコツ……大きな事になって、大仕事の、予想異常な。  
オオヤマ……大きな山、祭りの山車、曳き山車の愛称。  
オオネ……おおもと、もともとは、はじめの事は、だいたい。  
オオケネー……溜りが悪い、長持ちしない、弱々しい。  
オオゲナシ……大人たち、大きなひとたちの総称、成人の人。

お…オオキニ……………ありがとう、感謝、世話になって、お礼を。  
オオカタ……………だいたいは、ほぼみんな、おおよそは。  
オオツラミシ……………威張った顔を、嫌われ者の顔、異国者。  
オオブリ……………大きな形の、予想より大型、思わぬ収穫。  
オオサビ……………少し寒いような、目方が少し足りない。  
オオマキ……………大胆に撒く、いっぺんに広く撒く、大きな薪。  
オオガモ……………大きな釜を、大きな鎌で、大きな窯利用。  
オオクエ……………大きな田畑の壊れ、予想以上の被害、石垣被害。  
オオチャクナ……………横柄な、嫌われ者の、人並みにしない。  
オオブッチ……………威張りちらして、人の意見を聞かない。

オオマシ大……………大きな敵の増しを作る、変形の田んぼの敵の形。  
オオケンカウ……………大きな顔でのさばる、人と意見が違う。  
オオッチ……………芽がでた、発芽した、無事に芽が覗いた。  
オオイイジ……………大きな束にして、大きく束ねたもの。  
オオチョル……………合っています、入っています、ピッタリです。  
オカンナ……………お母さんは、母親は、母はどこに、母の愛称。  
オカチャン……………お母さん、母親の愛称、小さい子供が呼ぶ声。  
オカクズ……………鋸の切り屑、鋸でひいた時の屑、オガロノコ。  
オカイ……………お粥、飯をやわく煮たもの、病人などの食事。  
オカンニ……………お母さんに、母親に、小さい子供が母にと。

オカシュジ……………おかしくて、滑稽な、笑いが自然に出る。  
オカイネ……………野稲、畑で作る米、オカボ、水の少ない他方で。  
オカシゲネ……………おかしくて、笑いが止まらないような、滑稽。  
オカクザ……………鋸曳きの時に出る屑、オカ⇒鋸の事でその屑。  
オカキ……………餅を平たくして干したもの、さいころ状はアラレ。  
オキーチョケ……………起こしなさい、起こさないと間に合わぬ。  
オキユドチ……………起きようとして、起きる所で、起きますよ。  
オキナタリ……………置いたままにして、置いてあるので邪魔に。  
オキノニ……………起きたばかりの時に、今起きたところ。

お…オキンハテ……………沖のほうに、沖に出るのも。  
オキレンニ……………起きられないのに、起きるのが苦痛で。  
オキノン……………起きたばかりの時に、今起きたばかりで。  
オキータカ…起こしたか、起こしましたか、起こしなさい。  
オクッチャレ……………送ってあげなさい、送ってあげたら。  
オクルトイイ…送ってあげたらよい、送ってあげてはどう。  
オクリャコス……………送ってあげればこそ、送ったので。  
オクマジ……………置くまでは、奥までは、奥の間で、奥の方で。  
オクベラ……………奥の方で、奥の方向で、置く場所です。  
オクントグチ……………奥にある戸、奥の入り口の戸、裏の戸口。

オクドリ…奥の方まで、奥に進んでください、奥に回って。  
オクルワリニャ……………送ったのに、起きるのは起きたが。  
オケレメー…起きられないのでは、起きるのが大変のよう。  
オケリュウカ……………起きられるか、起きるのが大変なよう。  
オケレニャ……………起きられないのなら、起きるのが無理か。  
オケタンカ……………起きたのですか、起きたのかな、起きたか。  
オケノジャキ……………起きたばかりだから、今起きたところで。  
オケタナイイガ…起きたのはよいが、起きるのは起きたが。  
オケヨセン…起きるのに遅れて、起きるのに手間がかかり。  
オケタキコス…起きたからこそ、起きたのは起きたものの。

オケノニ…起きたばかりなので、起きたものの、起きたて。  
オケンワギユ…桶の輪替えを、桶輪の取替えを、桶輪補修。  
オケタテン……………起きたけれど、起きたのはよいが。  
オケドマ……………桶などは、桶は洗って、桶は乾かして。  
オケノン……………起きたばかりで、起きたまではよかったが。  
オコル…叱る、小言を言われる、説教される、勃起する。  
オコラルリャ……………叱られると、小言言われれば。  
オコサルル…起こされて、起こされる癖がついて。起こす。  
オコソドチ……………起こしてあげようと、起こしましょうと。



お…オスズリデン………遅くなっても、遅くなったとしても。  
オスサーカクセ…女性性器は隠しなさい、あそこは隠して。  
オスデン………遅くなっても、遅くても、時間がかかっても。  
オスナッチ…遅くなってしまって、遅刻して、遅れてご免。  
オスナリヤ………遅くなるのなら、遅れるようなら。  
オスキタヒミンズラ………遅く来たのは恥かしがりや。  
オズオズ………恐るおそる。恐縮して入って来る、恐怖心。  
オズンナショワネエ………恐ろしがるのは大丈夫、用心注意。  
オズウデン………恐ろしくても、怖いものでも、気をつけて。

オゼンバク………食器を入れた箱、一人前の食器れ。  
オセニャコマル………大人には困ったもの、大人の石頭。  
オセツタイ………施しの行事、お大師様の供養接待の施し。  
オゼタンカ………怖さに参ったのか、恐ろしさに固くなって。  
オゼマチャ………大きな広さの田んぼ、広い田んぼなどは。  
オセジャキ………大人だから、年長者だから、大者だから。  
オセルリヤ………押せれば、押せるならば、押せますか。  
オセレメーカー………押せないですか、押せないようならば。  
オセンコタネエ………押せない事はないが、押せないけれども。  
オゼチョケ………怖がっておくのも、恐ろしいふりをして。

オソロシュ…恐ろしいまでに、予想外の、まさかの結果に。  
オソマタワカッチョル………粗末は納得している、了解済み。  
オソソソウナゲ………女性性器のうぶ毛、なまめかしい場所。  
オソナリヤイイキ………遅くなってよいから、遅れてもよい。  
オソワリヤ………教えられて、習っておけば、襲われれば。  
オソユリヤ………教えておく、教えるのもよい方法、指導教育。  
オソダチャ………育ちが少し遅い、遅い発育状態、遅れ取戻す。  
オソルリヤ………恐れても、恐れるのも手段、恐れて勝ち取る。  
オゾオゾ………恐る恐るする、怖さがあるけれど、恐怖心。  
オゾンジョウ………一方的に、私たちばかりが、私たちのだけ。

お…オダブツド…失敗してしまうよ、元も子もなくなる、失敗。  
オダチノッチ…口車に乗って、調子に乗せられて。策略に。  
オタチ…出発して、出かけますよ、これから始まる。  
オダイサマ…弘法大師の事、大師の接待行事など、お接待。  
オタチャ…出発するのは、出かけるのは、いよいよ出かけ。  
オダテチュウニ…仕込まれた策略に、調子に乗せられて。  
オダチ…相手のペースにはまって、調子に乗せられる。  
オタンチン…知ってるようでしらぬ調子者、少し指数が。  
オタカラン…ぼんぼん育ちの、苦勞知らずの、利用される。  
オダテン…調子に乗せられそうで、旨く話に合わせる。

オダツリヤ…調子に乗せると、いい子に祭り上げる。  
オチョクル…冗談話に乗せられて、ジョークにかかる。  
オチチーチ…落ち着いて、見極めて、思慮深い才能。  
オチョウシモン…調子にすぐ乗る性格、おひとよし。  
オチャノコ…へいちゃら、気にも苦にも、おちつき払った。  
オチャデン…お茶でもどうぞ、心のゆとりも、度胸。  
オチョウチンモチ…仲取り持つ世話役、親でも言えぬ事が。  
オチャウキヤ…お茶のおつまみは、お茶に添えた心くぼり。  
オチチータ…落ち着いている、やっと安心した、一件落着。  
オチクージ…落胆してしまう、どうにもならぬ心境。不安。

オツムテンテン…幼児の遊びしつけ、押さない表情。  
オツリガクル…儲けがついてくる、思わぬ利潤、運得。  
オツモリン…終わりにしましょう、めでたくお開き。  
オツキサン…御月様、夜も照らしてくれる、名月。  
オツルンカ…落ちるかも、汚れが落ちるかも、垢が取れる。  
オツキオクジャキ…お着きの際に置くので、お着き供え物。  
オツキ…御輿が着いた、御輿の順幸で立ち寄る、着く。  
オットドッコイ…大丈夫、吃驚した、瞬間のろめき。  
オツツケモドロ…やがて帰りますよ、すぐ帰るから。

あとがき

長いご愛読の皆様の ご支援ご協力によりまして 方言集も  
続編14号…取り組んで21年目に入り 通算25冊が完成  
いたしました。今だから辛うじて残せた 故郷の古い生活用  
語であった方言 失われつつある時に書留め 消える前に保  
存できた幸せも 満喫しています。

それも多くのご愛読いただいた皆様のお蔭と感謝申してい  
ます。とくに最近になっては表紙画にも 積極的に支援して  
頂き素朴な冊子に 華を添えて頂き厚くお礼を申し上げます  
。これからも続く限り発行の予定を 頑張ることにしていま  
すので ご支援よろしくお願い申します。

限定100冊もなんとか ご協力で消化して継続出来 資料  
は沢山寄せられたものと 会員の余暇活動で際限なくあり  
5回目になった方言単語も 当分かかりそうで完成したら  
『野津原方言単語のひろがり』の 発行も予定しています。  
健在『お』の『サ』までで⇒7679語ですので 完成にな  
れば膨大な75万語くらいに なるのではと思います。

引き続きのご愛読ご支援の程を お願い申し上げます。  
皆様方のご健勝 お祈り申しています。



平成25年10月吉日

野津原方言調査会

伝言板  
ひ  
と  
こ  
と

次回は続編『No 15』になります。

- ★ 五助街道物語も5回目で 今市から小無田まで進みます。五助さんが旅人とユニークな話しを 旅のつれづれに語る周りの 歴史人情もカラマせて 世は情の旅 肥後街道……………。
- ★ ちよつと一服…四方山話がひろがる 人の知らなかった あんな話こんな話題。
- ★ 女性の底力…隠れた努力 輝かしい足跡 このままでは惜しい 話をいくつか。
- ★ 方言子供の世界…読み語りからを 幾つか載せて参考になれば 民話伝承も。
- ★ ふるさとん味…忘れられた 知らなかった故郷のおいしい味。
- ★ 四季の歳時記…昭和30年頃の生活環境を 振り返り甦らせて。
- ★ 民話、伝承…故郷に残る情愛の染みる話や 物語りを掘り起こして……………。
- ★ 方言単語のひろがり…『お』の夕行からで ここまでの総計は7679語になりました。

肥後街道物語りは 続編No 16号から 『今市⇒胡麻鶴物語り』を 予定しています。

